『アラブゲリラと世界赤軍』（一九七一年　京大出版会）

PFLP綱領的文章

第一部　戦略論

第一章　政治思想の重要性
第二章　われわれの敵は誰か
第三章　革命勢力
第四章　パレスチナのプチ・ブルジョアジー
第五章　パレスチナのブルジョアジー
第六章　パレスチナ革命勢力の組織と動員
第七章　アラブの革命勢力
第八章　世界の革命勢力
第九章　帝国主義の技術的優位に対して
第十章　パレスチナ解放戦争の目的と重要性
第十一章　戦略論のまとめ

第二部　組織論

第十二章　組織戦略
第十三章　革命理論なくして革命党なし
第十四章　革命党の階級構成
第十五章　党と大衆
第十六章　戦う党の建設
第十七章　民主集中制―革命党内諸関係の基礎
第十八章　批判と自己批判
第十九章　アラブ民族運動（ＡＮＭ）とパレスチナ解放人民戦線（ＰＦＬＰ）

序文

パレスチナ解放人民戦線は、その結成以来短い期間であるにもかかわらず〔注〕、客観的な見地から、政治―軍事的宣言を出すことになった。それは、広範なパレスチナ人民の関心をひきつけ、同時にアラブと全世界の関心を、より多くひきつけるためである。

〔注〕―一九六九年二月現在、その政治活動期間は、やっと一年半にしかすぎない。―

この宣言は、それが歴史的な革命へと発展できる要素をもっていればいる程、主体と客体の両面で、現実的な危険に直面することになる。そしてそれらの危険は、革命を脅かし、その成長や発展を阻止しようとするものである。

戦線（ＰＦＬＰ）の全般的な発展には、警戒心が必要であり、また歴史的な責任を深くくみとり、闘いの見通しや作戦の問題にあたって、科学的な正確さが大切であることを自覚することが必要である。そのことに照して、パレスチナ解放人民戦線は、一九六九年二月に大会を開催して、パレスチナ革命運動の戦略を究明し、一般的な政治、軍事、組織の段階を規定した。それによって、我々は、戦線の恒常的な成長を確かにし、そしてそのことは、戦線が遂行している解放闘争を高度にすることにつながるであろう。

第一部　戦略論

第一章　政治思想の重要性

勝利の基本的な条件の一つは、物事について明確な見通しをもつことである。すなわち、敵についての、また革命勢力についての明確な見通しである。戦いの戦略を決定するのはこの見通しであり、これがなければ、民族運動は衝動的な賭けとなって、すぐに失敗に終ってしまうであろう。このようにして、わがパレスチナ人民は、戦いと犠牲に捧げられた数十年を経て、われわれが勝利するためには不可避的に、武装闘争が必要条件であると確信するようになった。わが人民は、シオニストと植民地主義者の画策に対して、長い間戦ってきた。

一九一七年のバルフォア宣言以来、わが人民大衆は、自分達の土地を守り、自由を獲得し、植民地主義者から祖国を解放し、自決権を確保し、その資源を自分達の為に開発することのために、戦い続けてきた。シオニズムと植民地主義に対する戦いには、ありとあらゆる方法と形態がとられた。一九三六年には、わが人民は、自分たちの土地と自由と未来を建設する権利を防衛するために、武器をとった。そして何千人もの殉教者を出し、あらゆる犠牲に耐え抜いたのである。この時代、わが人民の武装闘争は、現在わが大衆がコマンド・アクション（決死隊活動）に結集しているのにも劣らない程の、大衆意識の状態を生み出していた。しかし、あらゆる犠牲にもかかわらず、すなわち、殉教者の数も、今日のコ

マンド・アクションのそれを越えていたし、手にした武器も、大衆の情熱もより多かったのに、わが人民は、今日に至るまで勝利できていないのである。彼等の大多数は、いまだ難民キャンプの悲惨な状態の中や、また占領の重圧の下に生きている。つまり戦いの勝利を得るためには、我々が武器をとるだけでは十分でないのだ。

歴史上の暴力革命の中で、あるものは勝利したが、他のものは失敗に終ってしまった。我々は、率直で勇敢で革命的な科学的理性をもって、事態に対処しなければならない。物事と戦いに参与している現実諸勢力に関する明確な見通しは成功につながるが、一方、性急で自然発生的な行動は、失敗につながるのである。このことは、革命を指導し、その戦略をたてる政治思想が重要であることを、明らかに示すものである。革命的政治思想は、真空の中にブラ下っている抽象的な思想でもなく、趣味的な学問でもなく、また我々が望めば、不用なぜいたく品として脇に放って置けるような、知識人の知的道楽でもない。科学的な革命思想は、明確な思想であり、それによって大衆は、自分達の敵の弱い点や強い点を理解し、また敵にあたって、自分達を支持し同盟する勢力を理解できるのである。同様に大衆は、いかに自分達の力、すなわち革命勢力を動員すべきか、またいかに敵の強い所に打ち勝ち、弱点につけ込むべきかを知ることができるし、そして敵を粉砕し、勝利をかちとるまでに、どんな組織動員と政治―軍事綱領が、自分達の勢力を拡大するのかを、理解できるのである。

わが人民大衆に、これまでの敵との対決において我々が敗れてきた理由を理解させるのは、この革命的な政治思想である。すなわちこの革命的思想は、なぜ一九三六年の武装革命と一九三六年以前の様々な試みが失敗したのか、また何が一九六七年の敗北をもたらしたのかを説明する。またそれは、

彼らがどのように同盟した敵と戦争をやっているのか、それに対抗するには、どんな同盟と手段が必要なのかを、正しく明らかにするのである。これらすべては、大衆が理解できるように、明確な言葉にされねばならない。こうしたことの理解を通して、大衆は、戦いの規模、諸勢力、武器についての明確な見通しをもつのだ。そして彼等の考えは、戦いについての一定の見通しと一つの戦略に統一された力として現われるのである。

われわれにとって、政治思想とは、目前の戦いの明確な見通しを意味する。そしてこれが、我々がこの問題の重要さと深刻さを強調する理由である。政治思想をもたず戦うことは、何を意味するのであろうか？ それは、計画を立てないで戦うことを意味し、またその誤りがいかに深刻なことかを知らず、またいかにそれに対処するかを知らずに、誤りに陥いることを意味する。またそれは、明確な見通しに基づかないで、政治的立場を一時の間に合せで作ることを意味する。政治的立場が一時の間に合せで作られると、普通、様々な立場が生れることになる。そしてその結果は、わが人民の革命諸勢力全体を、一つの強固な力として結集するかわりに、多くの道に分散させることとなる。

我々は、この問題を軽視することの危険性について注意しておきたい。我々の戦闘員の間や基地の中では、一部の「政治勢力」や「政治指導者達」に代表されることなのだが、革命的政治思想を、「政治的道楽」と混同する傾向がある。この傾向は、革命的政治思想を、武装闘争戦略がもちいられる以前に、パレスチナ民族運動によって使い古されてきた政治的方法と混同しているのである。またこの傾向は、政治思想を、革命に属する諸問題を論じる際の、ある種のインテリ達の複雑な衒学趣味と混同しているのである。こんな風に、問題の傾向は、政治思想を軽蔑し軽視している。だから、こ

こでわれわれが、徹底的にそれを改めることが必要なのである。「政治的道楽」を暴露し、武装闘争における我々の信念を強固にし、人民の前に、愚かな衒学趣味が、大衆運動の助けとなるどころか、革命の問題をこみ入らせているということを明らかにするのは、この革命的な政治思想なのである。

この革命的な役割を果すためには、政治思想は、①科学的でなければならず、②大衆のものとなる程、判り易くなければならず、③一般論を越えて、戦いの戦略や戦術にまで、できるかぎり深く入って、その問題に直面している戦闘員を導くものでなければならない。

革命思想がこの必要を満す時、それは、大衆の手の中の最も効果的な武器となる。そして彼らは、その諸勢力を統合して、その全勢力をあげた戦いの見通しと、また革命の開始から結末までの、これらの諸勢力各々の位置について、完全に明確な見通しがもてるようになるのである。

第二章　われわれの敵は誰か

毛沢東は、「中国社会各階級の分析」という論文（一九二六年三月）の中で、次のように書いている。

「だれがわれわれの敵か。だれがわれわれの友か。この問題は革命のいちばん重要な問題である。中国のこれまでの革命闘争はすべて成果が非常に少なかったが、その根本原因は、真の友と団結して真の敵を攻撃することができなかったことにある。革命の党は大衆の道案内であり、革命の中で革命の党が道案内をあやまったばあい革命が失敗しなかったためしはない。われわれの革命が道案

内をあやまらず、きっと成功するという確信をもつためには、われわれの真の友と団結して真の敵を攻撃することに心をそそがなければならない。真の敵と真の友を見わけるためには、中国社会各階級の経済的地位とその革命にたいする態度について、おおよその分析をしなければならない。」

（毛選集第一巻）

それでは、われわれの敵は誰か

どのような革命の政治思考も、まずこの問いを提出し、それに答えることなしに、まじまるものではない。そして、われわれパレスチナ人民大衆は、いまだこの問いに科学的に明確に答えているとはいえない。敵をはっきりと見定めないでは、戦いの明確な展望をもつことは不可能である。

これまでずっとわが大衆は、敵について感情的な評価をおこなってきた。われわれが二、三の勝利を得ると大衆の間には、敵の力を見くびり、戦いはすみやかにたやすく終り、われわれは短期間のうちに勝利できるだろうという一般的な気分が支配するようになる。一方反対に、われわれが敵から厳しい打撃をこうむると、ややもするとわれわれはもう一つの極に走って、敵の力にはとうてい勝てないと思いがちである。

このように感情的に動揺していては、われわれは、戦いについての科学的な見通しをもったり、理性的に忍耐強く計画をたてて、勝利し抜くことができなくなる。わが人民大衆が敵の真の姿を理解すべき時が来ている。なぜなら、そうした理解を通して、戦いの様相が大衆に明らかになるからだ。

(一)　イスラエル

われわれは、その解放闘争においてまず第一に、政治的、軍事的、経済的存在としてのイスラエル

に直面する。それは、その侵略的領土拡張をおしすすめる人種社会を維持し、われわれの領土、自由、権利を奪還することを妨害するために、その二五〇万の国民を最大限に軍事動員しているからである。敵は、軍備、訓練、機動力の面での水準の高さを明確に反映する高度な技術的優越性をほこり、また、それが生死をかけた戦いであること、および結局一木一草にいたるまで守るより他に道はないのだという使命感にもとづき、大量動員力をほこっている。

われわれは敵との対戦中、つねにこの敵の動員力および技術的優越性について心しておかなければならない。これまでわれわれが敵と対戦し、敗北してきた事実は、決して偶然の結果によるものではない。そして我々の敗北を、部分的だとか偶然だと弁解するのは、大きな誤りである。敵の真の姿を理解することこそ、勝利のための戦略計画の第一歩なのである。

しかし、われわれが戦いにおいて直面している敵は、イスラエルのみであろうか。われわれが敵をイスラエルのみと見なすことは、とんでもないまちがいである。それでは、自分だけは一人の敵と対戦していると思っているのだが、実際には十人の敵がいて、それらに対して全然準備をしてない人と、同じめにあってしまうからである。

(二) 世界シオニズム運動

事実、イスラエルは、世界シオニズム運動の不可欠な部分をしめ、まさにその支流の一つである。われわれはイスラエルと対戦するが、それは単なるイスラエル国家ではなく、強力なシオニズム運動に基盤をおくイスラエルなのである。人種的宗教的運動としてのシオニズムは、世界中いたる所のユダヤ人一四〇〇万人を組織補充して、イスラエルを支援し、その侵略拡張政策をまもろうとしている。

この支援は精神的なものに限定されるものではない。それは実際に、基本的には物質的支援であり、その中には人員、資金、武器、科学的技術、シオニズムの影響にもとづく運動によって締結された多くの同盟をふくんでいる。これらの支援に加えて、世界のいたるところで宣伝活動がおこなわれている。だからわれわれの敵がイスラエルとシオニズム運動であるという時、われわれは敵のなかに単なる一続きの言葉を加えたのではなく、われわれが戦いの見通しをたてるために計算に入れておかねばならない一定の物質的力を敵として加えたのである。

当面の報告では、このイスラエルと世界シオニズム運動に関する一般的な見通しにとどめるが、しかしわれわれは、イスラエルと世界シオニズム運動を、正確で詳細に研究することが必要であることは、言っておかねばならないそのような研究は、一般的見通しの妨げになるどころか、この見通しを確かにし、もっと明瞭にするであろうし、それによってわれわれの敵に関する表面的な評価を避けることができるであろう。

近年になって、イスラエルおよび世界シオニズム運動に関する研究に、いくらかの関心が寄せられるようになった。このような研究は、敵の政治的、軍事的、経済的、社会的側面についての事実を、われわれに提供してくれるものである。われわれの政治的および軍事的カードル（幹部）は、著者の思考の基調を支配している政治傾向を気にせずに、これらの研究書を読まれるように期待する。というのは、これらの個別データ、事実、詳細な情報により、われわれは、われわれが戦っている敵の真の具体的な姿をとらえることができるからである。

われわれが戦っているイスラエルとシオニズムに代表される敵は他の社会と同じくおのずから多く

の国内矛盾をもっており、イスラエルと世界シオニズム運動の間にも紛争があることは、指摘されるべきである。

これらの内紛は、われわれにとって不断に研究と検討がなされるべき課題である。抵抗運動の進展は、おそらくこれらの内紛をより激化させ、その結果われわれは、彼らを、解放闘争を利するはめに陥いるかもしれない。

当面の戦いに関していえば、これらの矛盾は、イスラエルと世界シオニズム運動内部の十分な団結とこの強化を損うまでには至らないであろう。われわれにとって敵の姿は依然として、戦いにおいてイスラエル人および全世界のユダヤ人を総動員して、われわれと対決し、すぐれた技術と確実な組織によって、強力に効果的に団結した陣営であるに違いない。

さて、敵にたいするわれわれの見通しは、この範囲にとどまるものであろうか。

これが、われわれの直面している「敵のすべて」であろうか。

もしわれわれが、戦いを科学的に評価することに失敗し、われわれの見通しをこの範囲にとどめようとするならば、再度くり返すが、われわれは大きな誤りを犯すことになるだろう。

パレスチナ解放の戦いの中で、われわれは第三の勢力に直面する。それは、アメリカ合衆国に指導された世界帝国主義である。

(三) 世界帝国主義

世界帝国主義は、その権利を防衛し維持するために猛戦している。その権利とは、後進国から富を強奪することから成っている。安い値段で買いとり、加工して再びこれらの国々の市場に高い価格で

売りつける。こうして帝国主義は、莫大なもうけを蓄積し、人民の貧困、権利剝奪、生活の悲惨を犠牲にして、資本を増やすことができるのである。アラブ世界は石油をはじめとして多くの資源をもち、また工業製品の広大な消費市場となっている。帝国主義はこうした現状を維持しようと欲しており、一方では帝国主義者の富の蓄積を進行させ、他方ではわれわれの貧困を増大させる。この目的のために帝国主義は、われわれの国土および人民を、こうした搾取から解放しようとするあらゆる革命運動に対して、かならず壊滅させようときめているのである。

アラブ世界における大衆的革命運動は、当然にもイスラエルを打倒することをめざす。なぜならば、イスラエルはこの世界の一部に侵入してきた勢力であり、他の部分をも脅かしている。大変危険な勢力だからだ。したがってイスラエルは、いかなるパレスチナ、あるいはアラブの革命運動に対しても、最後まで戦う以外にはないのである。これは帝国主義にとって、世界中でもっとも都合のよい場所をえたことになる。なぜならイスラエルを通じて帝国主義をこの地帯から追放しようとするアラブ革命運動と、戦うことができるからである。イスラエルはこの帝国主義の利権を守るために、パレスチナの土地を奪い、アラブ世界を支配する勢力、基地としてあるのだ。このような情報によって、イスラエルとシオニズム、イスラエルと帝国主義の組織的結合が生れたのである。それらはともに、パレスチナ、アラブ人民解放運動と戦うことに熱心である。このようにイスラエルを保護し、強化し、援助すること、およびイスラエルの存在を継続させることは、世界帝国主義の利益にとって重要な問題なのである。これによってわれわれは、イスラエル、世界シオニズム運動、世界帝国主義を明確に包括する首尾一貫した敵の姿をえるのである。

ここでもわれわれは、敵陣営についてのわれわれのイメージに、帝国主義を付け加えたことは、単なる言葉の上だけの定義ではないということを強調しておきたい。というのは、われわれが戦っている敵の姿は、まさに具体的なものとして現れるからだ。当地における帝国主義とは、イスラエルに対する多くの武器、もろもろの援助、資金調達である。それはファントムジェット機であり、秘密核兵器であり、アラブ側がとる無期限封鎖、戦争状態に処することのできる経済建設である。ここでは莫大な額にのぼる西ドイツのマルクや、アメリカのドルが、イスラエルの力を増大させる具体的な力となり、それゆえわれわれは、われわれの革命戦争計画に、これらを考慮しなければならない。

このようにわれわれの敵は、イスラエルだけではない。敵はイスラエル、シオニズム、世界帝国主義である。これらわれわれの敵をはっきりと科学的に知っておかないと、勝利することはむずかしいであろう。したがって、パレスチナ解放問題を国際レベルで「中立化」させようとする意見、すなわち、「アメリカをイスラエルの側につけておくのではなく、戦いにおいてなぜわれわれの側に獲得しないのか」という意見は、あやまりであり、最も危険である。それは非科学的であり、非現実的であり、不正確である。それは、われわれに対する敵の真相をおおい隠し、戦いの際には、誤った計画をおこなわせるので危険である。

われわれの敵の定義は、この範囲にとどまるものであろうか。これらが、われわれのパレスチナ解放戦争で直面する敵のすべてであろうか。

これがわれわれの対決している「敵のすべて」なのか。

いや、実質的に敵の陣営に立っている第四の勢力がある。われわれは、それに注目し、明確に定義

しなければならない。

㈣ 封建主義と資本主義に代表されるアラブ反動派

アラブ資本主義は、その利益がアラブ世界の反動政権によって代表され、保護されており、独立した一つの資本家連合をなしえてはいない。したがって、独立した政治的立場を獲得できないでいる。事実問題としてアラブ資本主義の一構成部分を形成するのみであり、世界資本主義と提携する弱い末端部分にすぎない。アラブ世界の百万長者達、すなわち、商人、銀行家、封建地主、大土地所有者、王、土侯、僧侶たちは、実際、世界帝国主義と手を結ぶことによって莫大な富をえているのである。彼らは、外国資本によって生産された商品の貿易商として、外国銀行や保険会社の二次的株主として、富を蓄積する。また彼等は、回教教主、土侯、王として権力者の座を占め、経済をこうした搾取勢力より解放しようとするあらゆる大衆運動に攻撃を加え、植民地を保護する。そうすることによって富を蓄積することができるのである。それゆえに、もしわれわれの国土が外国商品および外国投資の市場としてとどまるものでなかったならば、あるいはもし、植民地主義者がわれわれの石油やその他の資源を略奪し続けるのでなかったならば、彼等はその富を保持することができないのである。なぜならば、これが彼等の富を獲得し保持できる唯一の方法だからである。

このことは、帝国主義勢力を打倒するために、大衆によってなされる真の解放闘争が戦われるばあいには、アラブ反動派は、自分達の利益にしがみつき、帝国主義の維持をはからざるをえず、したがって大衆の味方になることはできないことを指し示している。

これらのアラブ反動勢力―とくにその頭のよいものは―イスラエルや世界帝国主義と自分達との内

紛を、自分達に有利に解決するために民族運動を利用しようとして、それらに対して外形上表面的な支持を与えることがあるかもしれない。しかし結局かれらは、必然的にいかなる人民解放運動にも、敵対せざるをえないのである。それはこの運動が、これら反動勢力によって代表される少数の私腹をこやすためではなく、大衆の利益のために植民地主義を根こそぎにし、独立経済を建設することをめざしているからである。

革命的大衆運動の成長とは、これらの反動勢力との関係でいえば、その特権を粉砕するために行動する人民の権利の成長を意味する。それゆえに、イスラエルや帝国主義と彼らとの対立が、どの程度に達していようとも、彼等は、自分達の主要な敵は、その利益と特権を完全に粉砕しようとしている大衆運動なのだということを、いつでも知っているのである。

アラブ反動派を敵勢力の一つに分類することは、たいへん重要なことである。なぜならばこの事実を理解しないでは、われわれは、明確な見通しをもてないからである。この事実を見落すことは、実際問題として敵陣営の実際の基盤および勢力を、考慮に入れないことを意味している。アラブ反動派は、大衆に奉仕する独立経済を妨げ、大衆の前に戦いの事実を偽り隠して、注意を他にそらせる役割を果し、そして一旦、時が来れば、革命の不意をうってわれわれを敗北の打撃に導くものである。

かくしてこれがすなわち、われわれがパレスチナ解放の戦いのなかで直面している敵の陣営である。われわれはこの敵陣営の全部隊をはっきり見きわめなければ、戦いに勝利することができない。それらを見定め、それらを共に結合している関連について理解すれば、次のことが明白になる。すなわち、われわれのもっとも強力な敵、真に主要な敵とは、世界帝国主義だということ、そしてアラブ反

動派はその手先の一つにすぎないこと、またイスラエルは、世界帝国主義の基地の一つであることによってなりたっているということである。世界帝国主義は、力となるあらゆる資材をイスラエルに与え、更にその位置的悪条件にもかかわらず存続させるために、高度な技術および経済力を与え、巨大な軍事力にイスラエルを転化させたのである。

このようなパレスチナ解放闘争は、世界中のあらゆる解放闘争とおなじく、後進国の富を略奪し商品市場にする野心をもった世界帝国主義との闘いである。当然だがイスラエルもシオニズム運動も、それ独自の特質をもっている。しかしそれらの特質は、イスラエルと帝国主義との有機的なつながりにてらして、見なおされなければならない。

第一次世界大戦以降、パレスチナ封建勢力やブルジョアジーは、イギリスの植民地主義がこの紛争にあたって中立的勢力として行動するであろうという点を基礎にして、あたかも敵はシオニズム運動とパレスチナに住むユダヤ人のみであるかのごとくに、この闘争を描き出そうとしてきた。比較的後になってはじめて大衆は、その前衛となる人民部隊をつうじて、イギリスこそ進歩的大衆の希望を粉砕するために、われわれの国においてシオニズム運動を強化し支援しようとしている真の敵であると気づくようになった。

今日、わが人民はもはや、新たな実験や自然発生的行動の必要はない。パレスチナ解放闘争において、われわれは第一に世界帝国主義と対決している。そしてわれわれの戦いは、基本的に世界帝国主義と、その基地として行動しているイスラエルと、またそれらに内通している反動勢力に向けられているのである。その場合われわれは、戦いの見通しがあやまりないものであることを保証するため

に、われわれの敵について明確な知識をもたなければ、勝利することはできないであろう。

敵陣営の勢力、分遣隊、同盟関係のすべてにわたって、われわれの見通しが明確ではない場合は、われわれがどのように革命的動員をかけたらいいのかということに明確でないということになる。しかしそうした動員こそが、敵と対戦した時、優勢をかちとることができるものである。

これらすべてを考慮すれば、われわれと対決する敵の正体は鮮明になってくる。

1　戦いにおけるわれわれの敵は、イスラエル、シオニズム、世界帝国主義、アラブ反動派である。

2　この敵は、高度な科学技術と生産力で優位に立ち、それはおのずから、高度な軍事力と巨大な戦闘力の優位へとつながるものである。

3　これらに加えて、敵は経済的、政治的解放をめざす大衆運動に対して長い経験をもっており、もし大衆が、革命運動の壊滅をはかる新植民地主義者のあらゆる策動に、反撃できるだけの政治意識をもたないならば、こうした運動を粉砕するだけの力をもっている。

4　イスラエルによって代表される敵の主要な軍事基地の動向と関連して、戦いの性格は、生か死かの戦いである。そしてイスラエルの政治軍事指導部は、あえて最後の一息まで戦い抜こうとするであろう。

このように敵の陣営をはっきりと見きわめることは、問題を正しい見通しのもとにすえ、戦いについての皮相な見解をとり除くものである。戦いの時と場所や、戦闘の性格を決定するのは、この明確な見通しなのである。言いかえれば、次のことを決めるのは、この見通しなのである。

1　革命理論および革命的政治思想の重要性。これは、敵との対決を堅持し、敵の反革命的行動や

策謀を撃破する革命勢力の動員を可能にするものである。

2　強力な政治組織。これは、戦いにおいて革命勢力の前衛であり、その最後の一息まで自己の存在と利権を守ろうとする敵の決意よりも、もっと強固な決意で武装した組織である。

3　革命的同盟の性格と規模。これは、敵陣営全体と対決するために維持し拡大されなければならない。

4　武装闘争の段階。これは最初はゲリラ戦争の形態をとりながら、長期的人民解放戦争へと発展していくのであり、敵の技術的軍事的優勢を克服して、最後には勝利を約束するのである。

戦いの性格を決定するのは、敵の性格である。そして、敵陣営およびその主要特質を、皮相にまた非科学的に見ることが危険なのは、このためである。

第三章　革命勢力

われわれの友―革命勢力とは何か。

パレスチナにおける革命勢力とは何か。

パレスチナにおける革命勢力を定義するにあたって、まず第一にわれわれは階級的視点に立つことが必要である。パレスチナ人は、どんな階級であろうと、イスラエルに対しては等しく革命的な立場に立っているとか、パレスチナ人の全階級は、領土を失い祖国を追放されているから、等しく革命的能力をもっているなどと言うことは、非現実的で非科学的な見解である。もしパレスチナ人民のすべてが同じ物質的生活条件の下にあるというならば、その見解は正しいと言えよう。しかし、現実はそ

うではないのであって、さまざまな条件下にあるということが、科学的に無視できない事実である。われわれは、こうした異る条件に着目し、それより生起するさまざまな立場に注意しなければならない。

一九四八年に、たしかに大多数のパレスチナ人民は祖国を追放され、ひとしく家をもたない条件下におかれたことは事実である。またそこに居残った人々も、同様な運命がまちかまえているという恐怖に、つねに脅かされた。しかし、以後二十年、パレスチナ人民は一定のはっきりした階級分化をとげたので、すべてのパレスチナ人民が領土をもたないとか、すべてが革命的であるとか言うならば、それは誤りであろう。20年の進展の間に、一定の明確な階級利害が生じてき、それが各々の立場を決める基礎となったのである。ブルジョアジーという階級が生れ、それはそれ独自の利害をもつようになってきた。それゆえにそれは、特恵的な階級的地位の保全にのみ関心をもっているのである。

それ故に、われわれはパレスチナにおける革命勢力を定義するにあたって、まず第一に階級的観点にたたなければならない。

パレスチナおよびアラブの右翼は、階級的観点に立つことをしりぞけ、それをあいまいにしようとしている。だからこうした策動を、われわれは打破することが必要なのである。

例えば次のように主張するものがいる。パレスチナは他の低開発諸国と同様に、高度に発達した資本主義社会のようには、階級化はすすんでおらず、したがって他の諸国と同一に階級問題をとり扱うのはまちがいである。

あるいはまた別の意見があって、われわれは民族解放の段階にあり、社会主義革命の段階でのみ正

当な階級闘争には、直接とりかかることはできない。だから民族解放の段階で階級闘争を語ることは、人民内部の階級矛盾の方が、全人民と植民地主義との矛盾よりも大きな位置を占めると言うことであると述べる。更にまた右翼的発想は、イスラエルは植民地主義の特異なかたちとして、パレスチナ人民のすべての階級をおびやかしていると、付け加える。そこでは、階級の問題は閑却視され、シオニズムとパレスチナ－アラブとの紛争にすりかえられ、すべての階級が危機的状況にあると、あおりたてられるのである。

こうした政治思想に対して、科学的に対決し論破することなく追従すれば、革命の中核をになう真の革命的階級の勢力を見失ない、全面的損失をまねくことになるであろう。そしてまた、革命の可能性を、定められた目的に到達することのできない、戦いの勝利につながる基本的路線を計画することのできない一階級に明け渡すことになるであろう。

低開発社会の階級構成は、当然、産業社会のそれとは異るものである。産業社会においては、強力な資本家階級が存在し、それと逆の位置に、大多数の労働者階級が存在する。

こうした社会での基本的な戦いは、これらの階級間の鋭い衝突なのである。しかし低開発社会では、こうした様相はあてはまらない。これは真実である。けれども低開発社会もまた階級社会であり、その中には植民地主義、封建制、ブルジョアジーによって代表される上層搾取階級が存在する。そして他方には、労働者、農民によって代表される被搾取の階級が存在する。それぞれの階級は、歴史の進路に関して、また革命に対して、それぞれの立場を持っているのである。上流階級は保守的であり、変革を拒絶し、歴史の進展に反対する。一方、下層階級は革命的であり、変革をもとめ、歴史を弁証

法的に止揚するものである。したがって、低開発社会の特殊性に関する議論は、それが、これらの社会の階級状態には特殊な性格があり、先進国の階級状態とは違っているということに止まっているかぎりは、科学的である。しかし一方、それがこれらの社会の階級問題を見落して、革命に対するこれらの階級それぞれの立場の相違を軽視することになるなら、それはかたよった見方であり、非科学的である。

例えばわれわれは、低開発の非産業社会に住んでいるが、しかしわが人民大衆は、全部が同一の生活条件下におかれている訳ではない。アンマンにおける一例を上るならば、Jebel-Luwaibdehの高級住宅街に住む人もあれば、Jebel－Nazifの貧民窟に住む人もある。また難民キャンプに住んでいる人だっているのである。ゆえにこれらすべての人民が、革命に対して同じ態度をとることはできないのである。

現在われわれは、民族解放の段階にさしかかっており、社会主義革命の段階ではないという主張にかんしていうと、これは、階級がそのために戦いにたずさわっている課題に関係したことである。そしてそのどちらの段階においても、階級の中のある部分は革命と共にあり、他方は革命に反対するのである。ゆえにそれは、階級や階級闘争の問題を排除するものではないのである。

民族解放闘争は、また階級闘争でもある。植民地主義、封建制、資本家によって代表される植民地主義者の利益と密接に結びついた階級が一方の側にあり、他の一方に国民の大部分をしめる他の階級が存在し、闘争はその両者の間において戦われるのである。それゆえ、もし民族解放闘争とは民族的な闘いであるということが、民族の圧倒的大多数によってなされる戦いであるという意味であるなら

ば、それは正しい。しかし、もし、これらの戦いが搾取と被搾取との間の階級闘争とは違うという意味で言われているとすれば、それは正しくない。

シオニスト、イスラエルの危険が、パレスチナおよびアラブ世界全体に脅威となっているとか、この戦いは、シオニズム枢軸とアラブ枢軸との戦いであるという意見もまた、この階級的観点から考慮されなければならない。もしこの意見が、危険なシオニズムは、パレスチナおよびアラブの大多数の大衆に脅威を与えているという意味であれば、それは正確な意見である。しかももしそれが、イスラエルおよび人民大衆に対して数の上では劣勢なアラブ反動派の利害の一致を否定したり、また、その他の階級の革命における役割の違いを否定して、都市に住むプチ・ブルジョアジーと、地方や難民キャンプの住民とが、革命において同じ役割を果すというような意見であるならば、それは正しいとは言えない。

要約すれば、われわれが階級的観点よりパレスチナの革命勢力を見る場合には、シオニズムの脅威の特殊性のみならず、低開発社会における階級状態の特殊性や、われわれの戦いは民族解放の戦いであるという事実を、考慮に入れなければならないということになる。しかしこのことは、革命的階級とその役割を見きわめる際には、これらの特殊状況に照して科学的にやらなければならないということであって、決して、革命勢力を定義するのに、階級的観点を放棄すべきだということにはならないのである。

右翼思想は、革命の指導的地位にブルジョアジーが立ち、その利益に合せて革命をおしとどめることができるように、革命勢力の規定にあたって、階級的観点を放棄しようとするのである。

われわれは、あいまいで不明瞭なヴェールをかけて、階級という客観的な事実をおおい隠そうとするあらゆる思想と強く対決しなければならない。今日、全階級が現実の戦場に登場しているだろうか。また戦闘員の圧倒的大多数は、労働者と農民階級に属していないだろうか。もし大多数の戦闘員が労働者と農民の子供であるとすれば、その時なにゆえに、パレスチナ革命の政治思想は、この明白な客観的事実と一致してはいけないのであろうか。

労働者と農民は、革命の大黒柱であり、革命の基本的な階級的基盤であり、その指導者である。科学的社会主義思想、世界中の革命の諸経験、パレスチナ世界で証明された事実に照してみて、われわれは、いかなる重荷でも引き受ける用意のある革命的階級を、明確に見きわめ確定しなければならない。

パレスチナ世界における革命的階級は、労働者と農民である。なぜならばこれらの階級は、世界帝国主義およびわが国におけるその同盟者の搾取に、日々抑圧されあえいでいるからである。

今日、悲惨な難民キャンプには、多くのパレスチナ人民があふれているが、それは労働者と農民である。われわれが難民キャンプについて述べる時、実際には、パレスチナ人民の中の労働者、農民、一部の貧困なプチ・ブルジョアジーの階級状態について述べているのである。一方、パレスチナのブルジョア階級はキャンプには住んでいないし、またプチ・ブルジョアジーの大部分も住んではいない。難民キャンプとは労働者と農民のことであり、その生活条件が労働者や農民とほとんど違いのない抑圧された一部のプチ・ブルジョアジーのことである。

なによりもまず必要なことは、物事について明確な見通しをもつことであり、この見通しに一致した明確な政治思想をもつことである。そしてまた、このパレスチナ民族運動の新段階の出発点にあたって、何よりも必要なことは、革命的勢力とその階級を見定め、革命を指導すべきなのはどの階級なのかを決めることである。そしてこれが見きわめられたなら、われわれはそれに従って行動しなければならない。もしそうしなければ、過去五〇年間わが人民大衆は大した成果もなく衝動的な戦いをやってきたのだが、それを再びくり返すことになってしまうだろう。

パレスチナ革命の物質力、その大黒柱、その基本的力は、労働者と農民である。この階級はパレスチナ人民の大多数を構成しており、あらゆる難民キャンプ、村、都市の貧民街にあふれている。ここに革命の力、変革の力が存在するのだ。ここにわれわれは長く続く戦いのために、現実的な準備がなされているのを見る。特にここには、人民が死んでも戦う以外ないような生活条件が存在する。なぜならばこのような条件下では、生と死の間には大した違いはないからである。

われわれはこの新しい客観的事実から出発しているので、戦いのこの新しい段階と過去50年間にわたる失敗ばかりしてきた戦いとは、明確に違っていると言えるし、また勝利を目ざす目的意識的な進軍と、成功できないあいまいでふらふらした自然成長的戦いには大きな相違があると言えるのである。

われわれが難民キャンプ、村、都市の貧民街に住んでいる労働者と農民に働きかけ、彼等に政治意識を植えつけ、組織と武器で武装させるならば、われわれは歴史的な解放、革命のための確固とした物質的な基盤を作り上ることになるであろう。階級間同盟が革命に利益となって、革命を動揺や逸脱や敗北にさらさないようになるのは、われわれがこのように強固な革命の中核部隊を生み出してからである。

第四章　パレスチナのプチ・ブルジョアジー

この階級は何ものか。その大きさはどれぐらいか。その革命に対する立場はどうか。この階級と革命の基本的主体である労働者、農民の間には、どんな関係があるのか。

プチ・ブルジョアジーとは職人や知識人から形成されており、学生、教師、若年従業員、小商店主、法律家、エンジニア、医師というような人々である。

低開発社会ではプチ・ブルジョアジーの数は非常に多く、住民の大部分を構成している。だからこの階級について論じる時には、わが人民の大多数について論じているのだということを知っておかなければならない。そしてまたわれわれは、この巨大な階級の位置づけをするにあたっては、合理的で明確かつ科学的な定義をすることが必要であるということも理解しておかなければならない。というのは、もしわれわれがこの階級に、それが実際にやれる以上の役割をあてがうならば、それはとんでもない誤りであり、革命の発展に悪影響を与えることであろう。一方反対に、われわれがこの階級にまちがった観点をもったおかげで、革命勢力の一つを失うことにでもなれば、それも大きな誤りであろう。

プチ・ブルジョアジーについて論じる場合には、それを一つの明確な輪郭をもった階級と考えて、われわれのそれに対する立場を定めることはできないということを、考慮しておかなければならない。この階級のうちのある部分は、安楽な生活状態を楽しんでおり、基本的必需品以上の余剰をもって生

活している。そしてこの部分は、常にもっと上のブルジョアジーになりたいと希っているのである。一方この階級のうちのその他の部分は基本的生活必需品を確保するのがやっとの生活であり、それゆえに彼等は革命に比較的密接な関係をもち変革をもっと求めているのである。このことは、この階級を支配している諸条件と、革命のそれぞれの段階においてこれらの各々がとる立場について、十分に研究する必要があるということを示すものである。

労働者階級と違ってプチ・ブルジョアジーは、一定の階級状態に生きている訳ではない。だからこの理由のために、この階級は、革命の進展につれてそれが到達する段階ごとに、その立場を次から次へと変える習性をもつのである。

しかし民族解放―民主主義革命の段階では、この階級は、労働者、農民に代表される基本的革命主体の同盟者になることができると、一般的に言うことはできる。しかしこの階級と同盟するにあたっては、それが司令部の地位に侵入してこないように注意しておかなければならない。なぜならばそれは、革命を動揺させ逸脱に導き、あいまいなものにしてしまうからである。

それ故に、この階級に対して革命がもつ立場は、次の主要な二点ということになる。

1　この階級は、革命の同盟者だということ。

2　しかしこの階級は同盟者であって、革命の基本的主体ではない。したがってその司令や戦略計画にもとずいて、革命の指導がなされてはいけないということである。それ故にこの観点から、われわれは主要な敵陣営との戦いでは、この階級をわれわれの同盟者と考え、同時にこの階級がその戦略計画にしたがって革命の指導権をとろうとするならば、そのいかなる試みとも戦う

ようにするということが、われわれとこの階級の関係を支配する法則として出てくる。

この階級とわれわれの関係にこの法則を適用することは、非常に微妙であり、時に非常に難しい問題である。というのは、この階級は数の上で多いばかりでなく、その階級の条件のおかげで聡明であり、高度な意識性や知識をもっているからである。それ故に、もし労働者、農民によって代表される革命の基本階級が、必要な意識性をもたず、能率よく組織されていないならば、この同盟をテコとしてこの階級が、革命の指導部の地位に入り込んでくることになるであろう。

われわれがこの階級と指導権をめぐって、すなわち革命戦略、その綱領、組織路線をめぐって戦い、なおかつ主要な敵との戦いに悪影響を与えずに勝つことができるためには、われわれは、いつどのようにこの階級を同盟者として受け入れ、いつどのようにそれと戦うかを知っていなければならない。もしこれをわれわれが知らないならば、この党派闘争には次のような二つの致命的な危機におちいる恐れがある。

1　この党派闘争が、われわれの主要な戦いの方を犠牲にしてしまうかもしれないということ。

2　プチ・ブルジョアジーがこの戦いに勝ち、その具体的な力によって革命の指導権をとることになるかもしれないということ。以上である。

このプチ・ブルとの関係において、われわれがどんな立場をとるのが正しいかという基準は次のようにもとめられる。すなわち、それが革命と大衆の利益のために求められている時は、同盟関係をすすめ、大衆が戦わねばならないときには理由を理解し、実感している時には、これと戦うということである。大切なことは、そのどちらの場合にもわれわれは大衆と共にあり、大衆はわれわれと共になければならないということである。コマンド・アクションがその存亡の危機に直面している時期、また敵の勢力が迫ってきて、われわれの同盟をもっと高度な水準にしなければならないという議論を一掃している時期には、われわれは同盟のために活動し、こうした同盟を求めている勢力として大衆のまえに立とう。戦う場合には、それは大衆の特殊な立場や問題意識に基づいたものでなければならない。この階級についてのわれわれの分析によれば、それは時々、その階級構成のせいで、あいまいな妥協的立場をとり動揺しがちだということになる。つまり、ある特定の場合が生じると、この階級の組織はこうした態度をとるということである。そういった場合には、大衆はそれと戦うことを正当と考え要求さえするであろうし、その遂行にあたってわれわれの味方になるであろう。一例をあげると、われわれには一九六八年十一月四日のヨルダンにおける事件がある。この場合、その国の反動政権はある陰謀を企てて、ゲリラ組織の一つに打撃を与えるという口実のもとに、コマンド・アクション全体を切り崩そうとした。それに対して、人民戦線（ＰＦＬＰ）は断固とした立場をとり、戦いを指導して中道組織の立場が動揺していることを暴露した。こうして大衆は立場上では一定のズレがあったにもかかわらずわが戦線に結集して、われわれは反動勢力の計略をくじくことに成功したのである。パレスチナにおけるわれわれの前に横たわっている長い革命の道のりには、次から次へとわれわれはこうした状況に直面しなければならない。そしてわれわれが、プチ・ブルジョアジーとその政治的代表者から、戦いの指導権を受け継ぐ機会もまた存在するだろう。

パレスチナ世界においてどの階級が指導権をとるかという問題は、一簡単に結着はつけられず短期間の内にはきまらない問題である。しかし機会があるなしにかかわらず、いつでも指導権を求めて戦う

ことが許される訳でもない。この問題を非現実的にあつかうのはまちがいである。パレスチナでの階級的指導権争いを、貧しい労働者、農民に有利なように結着づけるには、長い時間がかかるであろう。そしてその党派闘争をするにあたっては、われわれの主要な敵との戦いに悪い影響がないように、また大衆がこの戦いの根拠と理由を正しいと理解する時にしなければならない。

純粋の理論闘争に関して言えば、それが時を選ばず大衆に納得できないような形でなされたり、主要な敵との対立を越えてわれわれにその階級が同盟者であることを忘れさせてしまう様であるならば、それは戦いを横道にそらせ、われわれはその指導的な地位を失ってしまうであろう。

パレスチナの革命勢力に関してわれわれが基本的に考慮すべきことは、労働者と農民が革命の基本主体であるということと、革命組織の戦略、主張、理論、性格は、労働者のものでなければならないということである。われわれがこのことに深く明確な理解をもってその基本にそって行動する時には、民族解放闘争の段階において、われわれは有効な指導力を発揮し、プチ・ブルジョアジーではなく労働者がしいた綱領に従って、プチ・ブルジョアジーを誠実な同盟者として味方にすることができるであろう。

一つの綱領を基礎として適当な時期に同盟関係をもち、明確な主張と論点をもって適当な時期に対決すること、これがパレスチナにおける指導権争いを、難民キャンプの住民に有利なように解決する方法である。そしてそのためには、この解決のために必要な時期と方法に関して、現実的で弁証法的な観念的でない見通しをもつことが必要なのである。

今日、プチ・ブルジョアジーがパレスチナ民族運動の先頭に立っているということは、客観的に認

めておかなければならない。なぜならそれを踏まえておかなければ、労働者階級が首尾よく指導部の地位に立つことは困難だからである。パレスチナ民族運動の先頭にプチ・ブルジョアジーが立っている理由は、その数が比較的多く、その階級条件のおかげで知識や勢力をもっているということに加えて、民族解放闘争の段階では、この階級は革命的階級の一つだからである。だから、労働者階級が、政治意識と組織の点でいまだ十分に発達していると言えない間は、プチ・ブルジョアジーが、イスラエル、帝国主義、アラブ反動派に対する階級同盟の先頭に立つようになることは、むしろ当然なのである。こうしたことすべてに加えて、更にわれわれはパレスチナのプチ・ブルジョアジーの特殊性に触れておかねばならないし、更にまたパレスチナのブルジョアジーと、アラブ民族政権を支配しているアラブのプチ・ブルジョアジーとは、また立場が相違しているということも言っておかなければならない。パレスチナのプチ・ブルジョアジーは武装闘争の旗を掲げており、今日それを指導している。そしてそれが権力をになっていないという事実は、それをアラブのプチ・ブルジョアジーよりも革命的にしている。一方、アラブのプチ・ブルジョアジーは、その利益を維持し権力の座にとどまるために、反対陣営との長い決定的な戦いを回避しようとしている。

われわれがこの点を考慮に入れるならば、労働者階級がその戦略と綱領をもって、階級同盟の先頭に立ち指導権をとれるかどうかは、この階級がその政治意識と組織の発展をかちとれるかどうかに、また、武装闘争が拡大して革命がもっと発展するかどうかにかかっているということが分る。革命状況が進展してもなおパレスチナのプチ・ブルジョアジーが指導的役割を保とうとすることは、自からの利益を犠牲にして、自からの階級条件、ひいてはその思想、綱領、戦略と矛盾してしまうこと

とになるであろう。

そこで要約すれば、これまでのパレスチナにおける革命勢力の実情は、どのようなものであろうか。基本的な革命勢力は労働者と農民である。彼らはその生活条件によって、唯一革命を最後まで指導できるのである。労働者階級の徹底的で断固とした思想と戦略のみが、敵陣営と対決することを可能にするのである。そしてこの戦いにおいては有効な労働者の指導力こそが、プチ・ブルジョアジー階級を指導的な立場につけることなく、その動揺しがちなふらふらした思想や戦略によって革命の思想、戦略、綱領を薄めさせることなく、その科学的戦術によってプチ・ブルジョア階級を指導しぬけるのである。

第五章　パレスチナのブルジョアジー

パレスチナのブルジョアジーは、本来商業ブルジョアジーと銀行家である。そしてそのあいだの利害は互に結びついており、また、帝国主義の商業と銀行業の利害に結びついている。この階級の富は、外国商品の仲買取引、保険の運用、銀行業務などから作られている。この階級は戦略的には革命に敵対している。なぜならば、革命は、わが祖国における帝国主義の存在とその利権に終止符をうとうとしており、それはブルジョアジーの富の源泉を破壊するものだからである。われわれのイスラエルに対する戦いは、帝国主義に対する戦いなので、この階級は、それ自身の利害からして革命に反対し、帝国主義の側につくのである。

当然のことながら、この戦略的な分析はすべてに完全にあてはまるものではない。当然いくつかの例外もあるし、その上、一時的な戦術的立場によって、この戦略が変えられることもある。しかしこのことは、どんなにもわれわれが物事の一般的な様相について、長期的な戦略的観点をもつことを妨げるものではない。

どんな科学的根拠によって、パレスチナの全階級が革命勢力であるなどということが言えるのだろうか。今日、われわれの革命は武装革命である。パレスチナ人民の全階級が、この武装革命勢力であろうか。

一九六七年六月五日から、難民キャンプや村の若者達は武器を手にして、山に潜み自から都市を要塞にした。彼等は自からの銃弾でイスラエルに対し、身をもってイスラエルの弾丸に立ち向かっていった。まさにそれと同じ時に、因襲的なブルジョアの指導者達は、パレスチナ問題を話し合うために、Sassoon(サァッスーン)、Dayan(ダヤン)その他のイスラエルの指導者達を迎えていたのである。そしてそれは、イスラエルがパレスチナ問題を一応清算し軍事的勝利に達した後に、政治的な成果を上げようとしてもくろんだものであった。そしてこのもくろみは、もしコマンド・アクションの拡大がなかったならば成功していたことであろう。その間も、難民キャンプの若者達がイスラエルと死闘をくり広げる一方、ウェスト・バンク(ヨルダン河西岸)に住むブルジョアたちは、新しく自己の利益を敵国家と結びつけようとしていたのである。

こういうことからして、「われわれみんなコマンドだ」とか、「パレスチナ人は、その全階級をあげて武装闘争に参加している」とか、「われわれが祖国をもたないかぎり、金持も貧乏人もない」というよ

うなスローガンが広がるのを、われわれは批判せず見のがしておいて良いものであろうか。

革命は科学であり、科学的思想は確かな事実を求める。われわれは、偽りの標語やスローガンには惑わされない。それらは事実と矛盾しており、ある特定の階級勢力が自分達の利益を守るために言っているのである。

現在、シオニストが占領しているパレスチナに住んでいるブルジョアジーは、それがはっきりとはイスラエルと組んでいないにしても、革命勢力の中には入れられない。そしてイスラエルは常に、それを利用して革命を挫折させ、中途でおしとどめようとするであろう。

現在パレスチナの外に住んでいるパレスチナのブルジョアジーは、一般にコマンド・アクションが、現段階のような特殊な理論的、政治的、軍事的水準にあるかぎりでは、これと何ら利害の対立はない。それ故、彼らは時にはコマンド・アクションを支援して、その余分の富の少額を提供することもある。しかしわれわれは、パレスチナの民族運動が、明確に帝国主義と衝突する段階にまで革命的発展をとげれば、このブルジョアジーもその階級利益に固執する立場をとるようになるだろうということを、予想しておかなければならない。

勿論、一部のブルジョアジーはこの法則の例外にあり、パレスチナ問題の特殊性のために革命の側にとどまって、それへの敵対行動をさし控えるということもあるであろう。しかしこうした例外を認めても、われわれは、普通この階級の革命に対する立場を支配している一般法則を見失なってはならないのである。

革命の助けとなるどんな勢力をも一時的に利用しなければならないという原則は、健全な原則である。そしてそれはまた、適切な指導とは、できるだけ広範な戦線を主要な敵との闘いに動員することである。という原則でもある。そしてわれわれは、われわれの政治思想の明確さを損うことにならないならば、その原則に従って行動すべきである。明確な政治思想は、真の革命勢力を結集し動員する唯一の道である。明確な科学的政治思想によって、真の革命勢力を結集し動員することは、成功のための基本的な条件である。もし財政的援助がわれわれの物事に対する見通しをあいまいなものにする結果がともなうようなものであるならば、革命の成功にとって、そんな財政的援助よりも明確な政治思想の方が大切である。

以上のことから、今やわれわれはパレスチナ世界における革命勢力を、全体として具体的に明らかにすることができるだろう。

革命勢力とは、難民キャンプ、村、都市の貧民街の住民、すなわち労働者と農民である。そしてそれはまた、同様に革命勢力の一つであるパレスチナのプチ・ブルジョアジーと同盟関係を保っている。しかしこうした同盟は自ずから、知的、戦略的な抗争をともなうものであり、それは労働者の指導権、思想、戦略にもとづいて解決されなければならない。そしてパレスチナのブルジョアジーのある部分を、少くとも一時的に利用することもあるが、しかしそのことで、革命勢力の戦略、綱領の明確さを、いささかもあいまいにすることがあってはならない。

ブルジョアジーは数の上では、社会の単なる小部分にしかすぎない。ブルジョアジーが、社会の〇・五%から一%であることは周知の事実である。更にその上この階級は、祖国と人民のために、武器をとって死んでも闘う覚悟のある階級ではない。だから、革命勢力にかんするこうした階級分析は、

国民の力を分散させ内部対立に導くものだとする見解は、すべてあやまりである。われわれのこうした分析によって、革命はいかなる有効な戦闘力をも失なうものではない。反対にそれは、各勢力の立場にかんして、明確な見通しと規定を与え、また貧民階級に革命の指導部としての責任をまっとうさせるようにするのである。このような分析によって、わが人民大衆の圧倒的多数が貧民の指導の下に、イスラエル、帝国主義、反動派に正面から対決する民族解放闘争が生れるのである。そしてそのイスラエル、帝国主義、反動派こそは、貧しい人びとを悲惨と貧困の状態においやって、日々その人間性と生命の価値を奪っている張本人なのである。

第六章　パレスチナ革命勢力の組織と動員

こういった分析に基づいて革命勢力を動員するための組織は、どんな形態をとるのだろうか。現在のパレスチナの状況で、これらの各勢力の間の関係は、どんな形をとるのだろうか。こうしたことすべてに照してみて、パレスチナ民族の団結にかんするわれわれの考えは、どういうものであろうか。

科学的社会主義の理論で武装した政治組織は、労働者階級の力を最大限に組織し動員するための最高の形態である。このことは、今世紀のあらゆる革命的経済によって、完全に明らかになってきた事である。10月革命の経験のみならず中国、ベトナム、キューバのあらゆる経験が、この事実を示し確証している。

科学的社会主義の理論は、労働者階級がこうむっている悲惨な状態を、明らかに科学的に説明し、

帝国主義や資本主義がいかにこの階級を搾取しているかを明らかにし、現代社会は国際的にも地方的にも、戦争状態であることを指し示し、歴史の大勢を解明することによって、労働者階級の任務とその意義を示したり、この階級が武装しなければならないことを明らかにして、労働者階級に自分達の状態とその未来を自覚させ、このようにして、この階級の力を最大限に動員することを可能にするのである。

科学的社会主義のイデオロギーとその世界中の革命の経験は、労働者階級を組織しその力を結集してその力を強化し、さらに戦いの戦略を定めるにあたっては、革命的な労働者階級の理論で武装した革命的な政治組織がいかに大切であるかということをさし示している。パレスチナとアラブ民族運動の経験では、これまでわれわれは帝国主義、シオニズム、イスラエル、反動派との戦いに勝利をおさめてこなかったが、それはひとえにこの組織論を採用してこなかったからなのだ。パレスチナやアラブ世界の政治組織がだめなのは、それがこの理論や経験にもとずいて、階級イデオロギー的、組織的視点から形成されておらず、また、一般に政党組織それ自体の批判でなく、その路線の批判しかやられていないことである。パレスチナ民族運動の革命的前進のためには、原則として革命政党の思想の批判をしているのではだめで、その前になさねばならぬ唯一のことは、科学的社会主義の理論とこれまでの経験に基づいて、政治組織を形成することである。

この組織形態は、基本的な革命勢力としての労働者階級を結集できる組織的枠組であり、その上、民族解放闘争の段階では、多くの革命の経験が実証しているように、農民勢力を動員し最大限に結集できる形態でもある。

だから、この形態を採用することによって、われわれは労働者、農民によって代表される基本的革命階級の動員と組織化のための枠組を創り出すことになるのである。

しかし、プチ・ブルジョアジーに関してはどうだろうか。われわれの分析によると、プチ・ブルジョアジーもまた革命勢力の一つである。われわれはこの枠組の中にそれを動員できるのか。もしできないとすれば、われわれが全革命勢力を動員結集できる組織の枠組はどんなものなのであろうか。

パレスチナのプチ・ブルジョアジーの大部分は、科学的社会主義の理論で武装した政党組織にもとずく組織的枠の中には入ってこないであろう。社会主義革命の思想は、この階級の思想ではなく、また強固な義務と規律をもった党組織は、彼らにがまんのできる組織形態ではない。プチ・ブルジョアジーは、一般的な解放スローガンを越えないようなあいまいな思想と、自分達の能力以上のことを課したり要求しない政治組織に結合したがるものだ。だから彼等は、この枠組には参加しないで、科学的社会主義の理論とその組織路線を明確にとらない他のパレスチナの組織に入ろうとするのであろう。以上のことから見て、すべての革命勢力を包摂できる完全な組織形態は、労働者と農民を最大限動員できる科学的社会主義の政党組織であるが、それはまた同時に、革命の基本であり大黒柱である労働者と農民と革命勢力の一つであるプチ・ブルジョアジーとの同盟を達成するために、民族戦線の発展を要求するものである。

このことは、パレスチナ世界での革命勢力と、それを動員できる組織形態にかんして、われわれの見通しを完全なものにするのである。

われわれの見解では、これは、完全に物事の科学的な分析に一致し、そして客観的に革命の利益と

一致している形態なのである。この形態は、一方で戦いについての明確な展望を与え、他方では、基本的革命勢力の最大限の動員を可能とし、同時にできるかぎり広範な戦線を敵陣営に対抗して確立させるのである。

われわれの見解では、この展望のもとに提起された広範な民族戦線とは、パレスチナ民族の革命的な統一の達成ということである。もしパレスチナ民族の統一ということが、民主主義的民族解放の段階でイスラエル、帝国主義、反動派と基本的に対抗するように、すべての革命勢力を結集するという意味であるならば、その時これは、その目的を目ざす形態なのである。その戦線の枠内にあるこれらの三階級は、数の上からもパレスチナ人民の圧倒的大多数を代表している。

因習的なブルジョアジーの指導者達や反動勢力を革命の隊列の中に入れたり、また革命政党の思想を切り崩してその明確さをあいまいにするような民族的統一が、一部の者によって主張されているが、それは明らかに革命の利益に反するものである。

これまで述べたことは、パレスチナの各勢力の間の関係という主題に関するわれわれの基本的立場を、明確に示すものである。これらの主張は、この段階で生れてくる課題や問題に関して、われわれの立場を定められるようにし、パレスチナ世界内部の実情にかんして、われわれの立場を明確にできるようにするものである。そしてその中でわれわれは、パレスチナの革命勢力やその組織の間に、客観的な関係を確立するために努力しているのである。

1　われわれは、パレスチナ民族の統一を、敵陣営と対決するために全革命勢力を動員するための基本的要素とみなしている。そしてわれわれは、これに基づいてその達成のために有効な立場

をとらなければならない。

2　民族の統一の形態は、すべての革命的階級、すなわち労働者、農民、プチ・ブルジョアジーによって代表される戦線である。

3　われわれは、科学的社会主義の理論で武装した単一の革命政党に、労働者と農民を動員することにとりかからなければならない。これに基づいて、われわれは交渉と体験を通じて、こうした分析をとるように説得できたあらゆるパレスチナの左翼組織を統合するように、効果的に努力しなければならない。

4　プチ・ブルジョアジーは、科学的社会主義と強い政治組織で固められたこうした組織形態には参加してこないだろう。しかし彼等は、一般的な解放スローガンしかうたわず、明確な思想や階級的観点を出さず、その組織主体が自分達の能力以上のものを要求してこないようなパレスチナの諸組織にならば、加入してくることであろう。いいかえれば、この階級はまず初めに、「ファタ派」やパレスチナ解放機構（PLO）にならば、参加することであろう。

5　以上のことに基づいてわれわれは、現段階の主要な敵との戦いの性格にかんする見通しのみならず、イスラエルと対決している全革命勢力をまとめる民族戦線の形成が必要だという見通しに基づいて、「ファタ派」や「パレスチナ解放機構」と共に、民族戦線の確立のために努力しなければならない。そしてそれは、一方で戦闘に必要な階級同盟を提供するだろうし、また他方では、各自がその階級的視野に従って戦いの見通しや計画をたてる権利を保持するものである。

これが、パレスチナの革命勢力とその動員や結集の形態にかんするわれわれの見解である。パレスチナの勢力の間の基本的な関係のためにここで提起した形態は、われわれの進路を支配することになる一般的な戦略路線である。この路線にさし示された方向に従っていく時、われわれは多くの障害や混乱に出合うだろう。だから、その各々の時期の性格や、その時に存在し活動している様々なパレスチナの勢力の性格にかんして、できるだけ詳細に見きわめておくことが必要である。しかし一般に、そのような展望を支配するのは、この路線なのである。

さて、パレスチナ解放闘争に関して、われわれの戦略思想は、パレスチナ人民とパレスチナ世界の範囲内にとどまるものであろうか。

もし敵陣営の規模と性格を思ってみるならば、パレスチナ解放闘争のいかなる戦略思想も、アラブと全世界におけるあらゆる革命勢力を動員することを考えなければならないことが分るであろう。なぜならば、われわれがイスラエル、シオニズム、世界帝国主義、アラブ反動派に対抗できるだけの力を創り出せるのは、こうした動員と結果を通してのみだからである。パレスチナの革命は、アラブの革命と融合し、世界革命と手をつなぐことによってはじめて勝利を達成することができるのである。われわれの直面している敵の同盟の性格を思い起してみるならば、パレスチナ人民の範囲に限定してしまっていてはまったくダメである。

第七章　アラブ世界の革命勢力

アラブ世界における革命勢力とは何か。われわれはどのようにして彼らを動員するのか。パレスチナ民族解放運動とアラブ勢力との関係はどうなのか。

パレスチナ世界のみで革命勢力を結集し動員するだけでは、それが科学的社会主義を信奉しそれに導かれている政治組織を通して、被抑圧階級を最大限に動員し、プチ・ブルジョアジーと統一戦線を形成しているとしても、やはりイスラエル、シオニズム運動、帝国主義、アラブ反動派を含む強大な戦線からなる敵陣営をしのぐだけの革命陣営を創り出すことはできないだろう。

パレスチナ解放闘争の戦略には、一般にアラブ諸国、とくにイスラエルをとりまくアラブ地域の全革命勢力の動員と結集が必要である。だから人民戦線（ＰＦＬＰ）は、パレスチナ問題とアラブ問題の相互関係や、パレスチナ解放運動とアラブ解放運動の結合に、大変重きを置いているのである。またそれだからわれわれは、パレスチナ革命とアラブ革命の合体を創り出し、パレスチナとアラブ民族解放運動のために強固な基盤を形成する革命原則として、「アラブをハノイに！」というスローガンを、戦略的に強調しているのだ。そしてそれによってわれわれは、敵陣営と対決しそれを圧倒できるようになるであろう。

アラブ世界の革命勢力の動員が、パレスチナ革命に直結する仕事の一つだとは言わないにしても、パレスチナ革命と現在パレスチナ人民によって戦われている武装闘争（コマンド・アクション）の運命

は、ヨルダン、レバノン、シリア、エジプト、イラクおよびその他のアラブ諸国の革命勢力の動員を目指す革命戦略と、どの程度結合しているかにかかっていると言えるであろう。パレスチナの抵抗運動が現在危機をむかえているのは、われわれの時代で勝利したどんな民族解放運動も満していなければならない条件、すなわちイデオロギー的、戦略的、組織的な条件のすべては満し得ていないということだけから生れてくるのではない。パレスチナ抵抗運動のアキレス腱であり続けるだろうこの危機は、次のような事実に帰因しているのである。すなわちこの抵抗運動の存在しているアラブ諸国が、革命を支持して、それを増援しその活動地域を広げてやるかわりに、それを妨げ、一九六七年十一月二二日の安全保障理事会決議の履行を通じて問題を清算するように脅しをかけているという事実である。

こういうことからして、イスラエル、シオニズム、帝国主義、アラブ反動派に対する戦いとしてのパレスチナ解放戦略はアラブ革命戦略と結合したパレスチナ革命戦略であることが必要なのである。

イスラエルとわが故国のすべての帝国主義の利権に対して武装闘争を戦い、アラブ世界において、アラブ反動派やアラブ領土内のすべての帝国主義の利権と基地に対する武装闘争の戦線を拡大し、そして外はシリア、エジプト、ヨルダンから、内は一九六七年六月五日前後に占領された地域に至るまで、あらゆる方面から人民解放戦争戦略でイスラエルを包囲することが、勝利できる唯一の道なのである。パレスチナ人民がコマンド、アクションを通じて英雄的な態度を示すことが重要なのではない。重要なことは、解放と勝利である。敵陣営にかんするわれわれの定義に照してみると、解放の道とは、パレスチナとアラブに戦線を形成することである。それが、コマンド・アクションを成熟させ保護や支援を与え、その拡大への道を開き、その結果、イスラエルをあらゆる側面から包囲して、イスラエ

ルに支援や保護を与えているあらゆる敵勢力を呑み込んでしまうであろう。

アラブ革命運動の戦略は、その大筋ではパレスチナ革命運動の戦略と一致している。この一致の根拠は、アラブ諸国が現在通過している段階が、みんな同じだということである。イスラエルがシナイ半島とゴラン高地を占領しており、帝国主義がそこを基地としてアラブ解放をめざすどんな運動にも攻撃をかけているという具体的状況に照してみると、エジプト、シリア、アルジェリア、イラクでは社会主義的変革にむかって、階級的、経済的変化が起っているにもかかわらず、やはりアラブ人民が現在通っている段階は、民族解放、民主主義的民族革命の段階にあるということができるであろう。

現代、民主主義的民族革命の戦略は、ベトナムの経験とそれ以前のキューバや中国の経験を通して明らかとなっている。

この戦略の大綱とは次のようである。すなわち貧しい労働者と農民の力を最大限に動員し結集すること。これらの階級が、科学的社会主義のイデオロギーを信奉し導かれている政治組織を通して、革命の指導権をとりながら、民主主義的民族革命の性格とは利害対立のないプチ・ブルジョアジー勢力と同盟すること。また、ゲリラ戦としてはじまり人民戦争へと発展する長期の武装闘争は、敵の技術的な優位に打ち勝って、人民が勝利を獲得するようになるということを信じることである。

だがアラブ諸国での民族解放運動は、まだこうした路線に固まってはいない。

しかしイスラエルとその回りのアラブ諸国の衝突の性格からして、こうしたことのすべては、労働者と農民の指導権の下にこの戦略をとった民族解放運動の誕生と発展に道を開き、それを助ける客観的な条件を創り出していくであろう。パレスチナ民族解放運動とアラブ民族解放運動が同盟したり更

には合体するならば、われわれが対決している敵の性格によって戦いは長く苦しい戦いになるであろうが、それに勝ち抜けるパレスチナーアラブ勢力とパレスチナーアラブ戦略が生れてくることであろう。

そこでアラブ世界に今進行している状況から見て、パレスチナ民族解放運動がアラブとの諸関係を、どのように規定するかということがまだ残っている。

アラブ資本主義と封建主義は、いまだいくつかのアラブ諸国では支配階級の地位にある。現在これらの階級支配は、ヨルダン、レバノン、その他のアラブの反動政権によって代表されている。これらの利害は、アメリカの指導する世界帝国主義の利害とつながっており、イスラエルとこれらの政権の間には、部分的で時にはまったく外見だけの対立があるが、この部分的な対立は、世界資本主義という客観的に一致した傘の下に存在しているにすぎない。だから、現在はパレスチナでそしてこれからはアラブ武装闘争が戦われるであろうが、その時、これらの反動政権とは、一時的な考慮から戦術的な立場を相方がとることもあるだろうが、戦略的には常に戦いの関係をもたねばならない。

民族解放運動と反動資本主義政権との関係に関して言えば以上のとうりであるが、パレスチナの武装闘争やパレスチナ民族解放運動は、もっと微妙な状況に直面している。それは、アラブ世界の民族政権、持にイスラエルの回りにありとりわけエジプト、シリア、イラクという戦場の近くにある民族政権との関係をどうするのかという問題である。

これらの政権に対して、大胆に革命的な評価を下すようになったのは、本質的には六月敗北とその結果と意義に基づいてであり、更にはその敗北の結果として生れた戦略、綱領、主張に基づいてであ

る。この敗北とその意義や教訓に関する明確な洞察をぼやかしたり混乱させようとする試みがあるとすれば、それはいかなるものでも、主観的でかたよった関心から生れたものか、観念的で感情的な視点から生れたものである。そしてそれらは、物事を見る視点では、科学的で客観的な視点、大胆な率直さとはほど遠いものと言わなければならない。

六月敗北の結果、ゴラン高地やシナイ半島のみならずパレスチナ全土も占領され、数十万の市民は離散し、全民族が屈辱を受けることになった。六月敗北を分析し理解して、ついには不屈の勝利を確保する政治的、軍事的戦略を獲得できる明確な見通しをもつことが、唯一の革命的立場であり、それは、その見通しを一時しのぎにきめたり、あいまいにしたりはできない立場である。

アラブ民族主義政党組織のみならずパレスチナとアラブの大衆は、これらの諸政権を、パレスチナの解放や大衆の目的や目標を実現できる革命的で進歩的な政権と見なしていた。

六月戦争の徴候が見えはじめた時には、大衆も関係諸勢力も、六月に生じたような形の敗北を予想してはいなかった。六月敗北は、われわれの見通しが大変誤っていたことを証明した。敵についての知識とその明確な規定に、またその計画の評価に、その分遣隊および各分遣隊の潜在能力の決定に誤りがあった。また戦いの段階規定に誤りがあったし、それにもまして革命勢力全体の評価にもっと大きな誤りがあった。それを、これらの民族政権、アラブ民族組織が抑圧してしまったのである。

ではこれらの政権に対する正しい科学的な評価とはどういうものなのか。

第一次世界大戦にひき続いて、イギリスとフランスはイラク、シリア、レバノン、ヨルダンを占領し、植民地主義がエジプトやその地のアラブ領土に侵入してきた。そしてその植民地主義に反対する

大衆的民族解放運動は封建主義者、貴族、ブルジョアジーに指導されていた。その指導部は、パレスチナのHaj Avuiu Al-HusseinとそのArab Party（アラブ党）やシリアのShukui AL-KuwatliとそのtheNationalist Party(国民党)であり、その他のアラブ諸国にも似たような指導部があった。わが人民大衆が占領軍に対して起した武装反乱でさえ、ブルジョアジーの政治的指導下にあったのだ。しかし様々な事件を通して大衆は、植民地主義との戦いでこの階級が目指していることは、見せかけの独立を達成して自分がその権力機構の頂上につくということ以外の何物でもないということを知った。このことによってブルジョアジーは、人民大衆が血の犠牲を払ってきた解放と統一のスローガンには何の関心も払うことなく、植民地主義の仲間となって大衆を搾取し、われわれの祖国への資本投資から生れる利潤の分前を得たのである。大衆がこれらすべてをまのあたりに知った時、片や封建的、貴族的、ブルジョア的指導者達とその諸政党と、片や大衆運動との間に、闘争が開始されたのである。この新しい戦いの段階では、大衆は、若い知識人、専門家、自由将校団によって指導された。そして彼等は主としてプチ・ブルジョアジーに属し、プチ・ブルとして行動していた。プチ・ブルジョアジーは成長しつつある階級であり、直接的、間接的に植民地主義的資本主義と同盟していたブルジョアジーや封建主義に対する戦いで、大衆を指導したのはこの階級であった。30年代後期から40年代初期にかけて、こうしたプチ・ブルジョアジーは、全アラブ地域に政治的、軍事的党組織を形成していた。一九四八年にイスラエルが建国され、そして不幸が始まったのである。このことは次のようなことを大衆に明らかにした。すなわち、ブルジョアジーは傀儡政権しか作れなかったのであり、彼等はイスラエルに対しては無気力であり、大衆の目標とは本質的にあいいれないのだという事実である。こうし

て一九四八年の不幸は、これらの政権のうちのいくつかの崩壊と、プチ・ブルジョアジーの民族主義者の指導する政治的、軍事的、民族的組織が権力を引き受けることに道を開いた。このような組織は、一般にプチ・ブルジョアジーから成り、この新しい組織のまわりに結集してきた労働者と農民の間で活動していた。というのは、彼等は植民地主義、封建制、資本主義と対決していたからである。

こうした新しいアラブの政権が登場し存続できた基本的要因は、明らかにソビエトの勝利と多くのヨーロッパ社会主義政権の登場という、第二次世界大戦から生れた国際状況であった。

このようにして、この地域の基本的な対立は次の様な形をとるようになった。

すなわち、植民地主義、アラブ反動派、イスラエルが一方に在り、それに対して、プチ・ブルジョアジーの指導のもとに労働者と農民の同盟があるということである。

こういう形に基づいて、アラブ世界に最初に出現した民族政権は、エジプトのナセル政権であった。そしてそれからこの種の政権は、シリア、イラク、アルジェリア、南イェメンに拡大していった。

ナセル政権は、この種のもっとも明確で典型的な例であったし、今もなおそうである。

これらの政権を評価し、それが40年代から一九六七年六月までにどんなことをアラブ世界でやったかということを歴史的に評価する場合には、これらの政権、特にナセル政権が行った多くの革命的業績を軽視してはならない。この政権は、スエズ運河地帯に駐屯していたイギリスの占領軍を追い払いまた植民地主義的な軍事条約のすべてに対する戦いをおこなって、エジプトとその大衆の運命を制していた植民地主義者と反動派の同盟をとり払うことができたのである。そして植民地主義は、ソビエトの脅威に対する防衛条約という口実のもとに、この地域に再侵略をはかろうとしていたのであった。

さらにナセル政権は、植民地主義がこの地域に課していた封鎖を破って、社会主義陣営との軍事的、政治的、経済的な関係を確立した。さらにその上ナセル政権は、エジプト人の民族運動を、アラブ民族の範囲にまで枠を広げて、アラブ現代史で初めて連合の達成をなしとげた。それはまた、政治的解放と社会問題を結びつけ、土地所有権や農民と土地所有者の関係をも含む農地改革を断行し、主要産業および通商事業を国有化し、国有化に基づいた発展計画を掲げた。それは、エジプトを社会主義的変革の端初にすえたのである。そしてこれらの変革は、革命思想の分野での同様の変革を伴っていた。こうしてそれは革命思想を、連邦主義や社会主義の一般的な解放のスローガンの水準から引き上げ、革命勢力を階級的な観点から眺め、進歩の動きを展望し分析して社会主義的な路線をとりはじめたのである。

これらが、ナセル政権によって成し遂げられたことの中の重要なものであり、それに基づいてその他のシリア、イラクなどの民族政権が着手しようとしていることである。

こうしたことは、その反対陣営に警戒心を呼び起した。それは、アメリカに指導され、力による政権打倒をも含めた種々の手段で、こうした進展を挫折させようとしていたのである。そしてこのような反対陣営の警戒心は、これらの政権の側にも同様の警戒心を要求したのであった。それによってこれらの政権は、確固とした不動の勝利を維持できるまでに大衆の力を政治的、軍事的、経済的に動員することによって、新たな革命の水準を達成できたのである。

しかしこれらの政権は、その階級的本性が自分達に課した綱領や計画の範囲内で活動を続けてきた。この点でこれらの政権には、その構造的問題や計画上の問題が、生じ始めたのである。60年代の中期

から六月敗北に至るまで、ナセル政権はこれらの諸問題を解決できないままですごしてきた。そして六月敗北は、この政権の構造に関連した問題を浮き彫りにし、その階級的限界では帝国主義ー反動派ーシオニズムーイスラエルの陣営には勝利できないということを明らかにしたのである。

これらの民族政権の性格は、そのもととなった組織の性格や物の見方の所産であり、その社会主義的変革の程度に応じて、また彼等の新しく産み出した階級状況に合せて形成されたのである。これらの政権は、封建主義と資本主義の利権や大衆の搾取を粉砕したが、しかし工業、農業、商業部門でのプチ・ブルジョアジーの利益を維持し、同時に軍人、政治家、行政官という新らしい階級を作った。そしてこの新階級はひとしく上層階級としてプチ・ブルジョアジーと利害を共にしていたのである。この上層階級は、自からの利益や戦いに関するその見通しに反しない限度で、その利益のために実験を続けることが必要であった。この階級は、植民地主義や反動派には敵対していたが、同時に自分達の享受している特権も維持したかったのである。これらの政権の政治的、経済的、軍事的、イデオロギー的綱領の性格を規定していたのは、こういった事態なのである。

こうした事態に基づいてこの階級は、植民地主義やイスラエルとの対決の展望を、軍部の建設を通して定式化しているのである。なぜならば、この階級は次のことを理解しているからである。すなわち、人民解放戦争であれば、指導者の地位に立つ資格があるかどうかは、自らが進んでそのあらゆる特権を捨て、今日のコマンドと同じような生活に従うかどうかにかかっているということを知っているからである。またこうした事態に基づいて、あいまいな形の大衆の政治的動員が主張されているのである。なぜならば、政党組織によって武装闘争へ大衆を真に革命的に動員することは、労働者と

農民から新しい指導部が登場してくるということであり、そのことは、大衆の力がこのプチ・ブルジョア階級を監督しその責任を問うことができるということだからである。したがって、この階級は現在の限度でその社会主義的変革をとどめておくように、その経済計画をしにているのである。結局この階級は、まだこの体制の中に労働者や農民の労働の搾取が存在しているにもかかわらず、それをあいまいにボカしてしまうばかりでなく、戦いの本質、この階級の本質、その綱領の本質をあいまいにする政治思想をうみ出したのである。

こうしてみると、六月敗北は、われわれが単なる軍事的敗北をこうむったということではない。その敗北は実際には、これらの政権とその綱領の敗北であり、かれらでは、帝国主義やその同盟者とそのわが領土での計画に抗してうち勝てる政治的、軍事的、経済的動員を、有効に行なう能力がないということである。

六月敗北の後でさえ、これらの政権は、これまでと同じ軍事計画の範囲内で動こうとしている。かれらは、安全保障理事会の決議を戦争以外の手段では履行できないということが分った上は、ソ連との同盟を通して、侵略された部分のすべてをとり返すことを目ざす戦術的な戦闘を行なおうとしている。しかしそれは、同時にこの安全保障理事会の決議が、新しい領土内のイスラエルの権利を認めることを意図しているということを知っているにもかかわらずなのである。これらの政権はコマンド・アクションを支持しているが、それは単に自分達の受け入れることのできるような解決に従って、帝国主義とイスラエルが安全保障委員会決議の履行を受け入れざるをえないように、圧力をかけるための革命戦術として支持しているにすぎないのである。

民族政権は、労働者と農民階級の指導のもとに、急速な政治、軍事、経済綱領にもとづいて大衆がおこなう長期の人民解放戦争を目ざす徹底的な革命戦略にはいまだ反対している。しかしこの人民解放戦争戦略は、今日ベトナム民族解放運動によってわれわれのまえに明らかになっており、われわれが帝国主義の技術的、経済的、軍事的優越に対抗できるのは、この方法によってのみであるということが明確になっているのである。

われわれがベトナム解放運動を、アメリカやベトナムの反動派に対する勝利の戦いをおこなって、現代で成功している革命の一例としてあげたとしても、われわれは、イスラエルによって代表される帝国主義の特殊性や、わが国土やその戦いの特殊性を、いささかも無視するものではない。実際われわれは、ベトナム戦争の主要な戦略路線のことを、常に言っているつもりである。ベトナム戦争は、科学的社会主義を信奉し、労働者階級の指導権と民族戦線のスローガンのもとに、最大限大衆の力を動員する強力な政治組織によって代表され、またゲリラ戦争、人民解放戦争のコースをとり、長期戦を勝ちぬく決意から生まれた政治的、経済的、軍事的動員というコースをとっている。そしてその勝ち抜く決意は、その社会の貧しい階級、すなわち帝国主義やベトナム反動派がおしつける邪悪できたない搾取の重荷の下に生きるのにがまんのならない階級のものなのである。そしてわれわれはまた、ベトナム解放運動によって確立された世界革命同盟が、その重み、力、計画によって帝国主義と対抗することができるのだと言いたいのである。

これらすべてのことにかんがみて、パレスチナ、アラブ民族解放運動におけるこれらの政権の役割について、つまりかれらと革命的なパレスチナ民族解放運動の関係形態について、われわれは科学的

な評価を下すことができるであろう。

1　これらの政権は、帝国主義、シオニズム、イスラエル、さらに封建主義と資本主義に代表されるアラブ反動派に対して敵対している。

2　これらの政権は――エジプトの場合のように――経済社会構造を社会主義的方向に変革しはじめるといったように、民主的民族革命の道で多くの革命的業績をなしとげた。

3　これらの政権は、自分たちの経験から生れた階級構成のせいで、もはやその革命の道を前進し続けることができず、また帝国主義、イスラエル、アラブ反動派の陣営に生れた警戒体制に対抗できるだけの革命的前進をとげられないのである。

4　戦いに直面した時のこれらの政権の綱領は、その権力ピラミッドの頂点に立ち、これらの政権の指導部の地位を占めているプチ・ブルジョアジーの綱領である。しかし六月戦争とその後に生れた事態は、この階級では、敵との戦いにがんばりぬき勝利できるイデオロギー的、政治的、軍事的、経済的動員をやりとげることはできないということを明らかにしている。

これらの政権は、いまだ伝統的な戦争戦略と変革綱領を採用しており、その一般的構造を全く根底的には変革しないで、その実験がもたらした大きな欠陥をうずめようとしている。

5　これらの政権が、一方では帝国主義やイスラエルに敵対しているという事実と、他方では敵に対して妥協的で徹底しない綱領を採用しているという事実にかんがみて、これらの政権との関係は、同盟と闘争の関係だということになる。つまりかれらは帝国主義やイスラエルに敵対しているから同盟者であるが、その戦いにあたっては、かれらの戦略と対決しなければならないのである。

6　イスラエルの占領に対して、パレスチナやアラブの民族解放戦争をやるにあたっては、二つの戦略が存在するだろう。すなわち一方にはプチ・ブルジョアジーの戦略があり、それは、もし平和的な解決ができないと分ったならば、軍事制度の改革を通じて伝統的な戦争戦略を理論的に採用して実行するのである。他方には労働者階級の戦略がある。それは、ゲリラ闘争と人民解放戦争を理論的に採用し実行しており、帝国主義に対して、大衆のイデオロギー的、政治的、経済的、軍事的動員を最高水準に高めるような革命的動員綱領をもった広範な民族戦線を基礎にし、労働者階級の指導のもとに、大衆が遂行するものである。

7　これら二つの戦略と勢力は、最終的に労働者階級の戦略がパレスチナやアラブ世界で支配的になるまでは、当分の間、共に同盟と対立の関係をもち続けるであろう。そしていつかは、勝利を決意しまた勝利できる労働者階級のイデオロギーと綱領が、人民解放戦争をおし進めて、労働者階級の指導のもとに労働者、農民、プチ・ブルジョアジーからなる広範な階級同盟が、敵と対決することになるであろう。

以上がパレスチナ民族革命と全アラブ諸勢力との関係の形態規定である。

戦略レベルではパレスチナ革命は、アラブ反動勢力やそれが代表する政権とは衝突することになるだろう。そしてプチ・ブルジョアジーがその権力ピラミッドの頂点を占めている民族政権とは、同盟し対立する関係をもつことになるだろう。またそれは、労働者と農民の政党組織によって代表されるアラブ革命勢力とは、合体する方向で同盟関係を確立することであろう。一般にアラブ世界、特にイスラエルのアラブ諸国では、その戦いの性格とそれが生み出す革命戦略の性格のせいで、これらの革

命的勢力が登場してくることであろう。

こうした革命像にしたがって、つまり労働者階級に指導され、ゲリラ戦争路線をイデオロギー的、政治的、軍事的、経済的に最高度に採用する全反帝国主義勢力を包括したパレスチナとアラブの革命像にしたがって、われわれは、まずパレスチナ段階で、つずいてアラブ段階で、パレスチナ解放闘争の完全な戦略的見通しをもつことになるのである。

第八章　世界の革命勢力

現在、世界帝国主義は、かつてそれとはことなる状況や条件にあり、かつてその方法とはことなる新しい方法によって、人民を搾取する道をおしすすめている。一方、反帝国主義陣営もその規模と力量において、第二次世界大戦以前とはことなる新しい地位と水準に達している。世界中の解放運動は、基本的な国際的事実となって、現代という時代を支配しているのだ。パレスチナとアラブの解放運動は、真空の中で運動しているのではない。それは、特定の世界状況のただ中に存在し戦われているものであり、それに影響を与えまたそれから影響を受けているのである。そしてこれらすべてが、われわれの運命を決定するのだ。民族解放運動の活動している国際的舞台は、人民の運命を決定する上で、常に基本的要素であったし、これからもそうであろう。

第一次世界大戦は、帝国主義列強間の戦争であった。そしてその目的は、これらの諸国の間で世界市場を再分配することであった。その戦争は、人民の富の搾取と略奪のための、また市場独占のため

の競争の中で、世界資本主義ブロック間の武力対立が爆発したものであった。その戦争は、先進諸国の労働者階級や、資本主義の搾取に拡する従属民族によって戦われた革命戦争ではなかった。同じことは、ある程度まで第二次世界大戦にもあてはまる。つまりその世界を舞台として主に展開されたのは、植民地主義的資本主義諸国間の争いだった。先進国の労働者階級や隷属民族に代表される革命勢力は、これらの戦争を革命戦争に転化する地位には居なかった。しかしこの革命戦争こそが、世界の基本的抗争を搾取と被搾取との戦いとして表現できるものだったのである。しかし第二次世界大戦の結果や、それにひき続いて起った事態は、新しい世界状況を形成することとなった。植民地主義勢力は、一つの陣営に結集され固められた。すなわちそれは、社会主義陣営に対抗して、アメリカが指導する帝国主義陣営であり、人民をこの戦いで敵側にあるものとして迫害する陣営である。

ソビエト同盟はこの戦争で勝利をおさめ、社会主義陣営は、多数の東ヨーロッパ諸国を含めて拡大された。また隷属していた人民は、自由と権利を守るためにたち上り、毛沢東と中国共産党に指導された偉大な中国革命が勝利したのである。そしてこうした一連の事件やその進展は、第二次世界大戦後の数年間のうちに、すべての資本主義―帝国主義勢力を連合させる具体的な要因となったのである。イギリス、フランス、オランダ、ベルギーに代表される伝統的な植民地主義勢力は、戦争の痛手にひどく苦しんでおり、一方、ドイツ、イタリア、日本は、敗戦の重荷にあえいでいた。そして第二次大戦直後のヨーロッパにみられたように、こうした状況の中でアメリカ資本は、各国の再建過程を通じて浸透し広がっていったのである。

これらのすべてのことが、次のような帝国主義の姿と基本的様相を形ち作ったのである。

1　すべての植民地主義的資本主義勢力は、ともに一つの陣営、すなわちアメリカの指導する世界帝国主義の陣営に結集した。

2　巨大なアメリカ資本は、その広範な分野での活動力とヨーロッパ資本との提携によって、この陣営の団結と利害関係の一致をなす具体的な根拠となった。それはまた、この陣営の指導権をアメリカがもつための具体的根拠でもある。

3　この陣営の仲間どうしの対立は、イギリス、フランスに代表される植民地主義と、アメリカ合衆国に代表される新植民地主義との間で、時々一定の紛争の形をとっているが、しかしこれらのすべての植民地主義勢力が社会主義陣営や民族解放運動との闘争で直面しはじめている主要な対立にくらべれば、単なる部分的な対立にすぎないものとなっている。アメリカ合衆国とイギリス、フランスとの間のこの部分的な対立は、一九五六年のイギリス、フランス、イスラエル三国連合によるスエズ侵略戦争、あるいはアルジェリア革命、またアフリカのある地域の例がそうであるように、目だった形をとることもあるが、一般的には帝国主義と革命勢力との闘争という、もっと重大でもっと深刻な対立に左右されているのである。

4　アメリカ帝国主義との絆を断ち切ろうとするド・ゴール政権のフランスのこころみは、これまでこの状況にどんな根底的変化ももたらしてはいない。

5　生産手段や軍事産業の技術的発達と量的拡大によって、世界市場を統制する面や、その存在と利益を守る能力の点で、帝国主義陣営の地位は強化された。

われわれはもちろん、こんにちアメリカ合衆国が、多くの矛盾や問題に直面していることはよく知

っている。アメリカの国内情勢はいつも現実の危機に満ちており、ベトナムの場合のように人民の運動に対処しえぬこと、そしてまたしばしばアメリカとその同盟諸国との間でおこる対立の悪化などは、こうしたあらわれである。しかしこうした面から見たアメリカの姿は、技術の進歩、生産の拡大という面を補足するものであり、アメリカの完全な姿をつかむためには、われわれはその両面から眺めなければならないのである。

6　今日アメリカは、かっての植民地主義のように占領軍の力によってその利益を防衛する方法とはまったくことなった新しい技巧的方法をもちいて、その利権の維持と保護につとめ、革命陣営に対抗しようとしている。そしてこの新しい方法こそ、新植民地主義の基本的な姿なのである。

アメリカ合衆国は、一連の協定や防衛条約を結ぶことによって、社会主義陣営に対抗し、それを包囲し、その伸長をくいとめ、民族解放運動を骨抜きにしようとたくらんでいる。またこの条約政策に加えて、経済政策を行使する。それは、人民の搾取から生れた利益の分配を、その地域の権力が受けられるように仕組んだものである。このようにして、新植民地主義の存在によって利益を得たその社会の権力は、みずからカイライ政権となり、その背後でアメリカは安心してその影響力と利益とを保持することができるのである。さらにアメリカ合衆国は、新植民地主義的な方法によって、民族解放運動を手なずけようと懸命になっている。それは、解放運動とそれによって生じた情勢との共存政策によって、あるいはまた、自分達の利益が確保されるという範囲内ならば、一定の利益を保障し、民族の誇りをも満足させるという譲歩政策によっておこなわれている。更にその上、ソビエト同盟に対しては、核戦争の脅威によって、植民地主義に対する戦いの支援や背後からのあと押しをやめさせよ

うとはかり、また解放戦争にたちあがった人民を、局地戦争によって敗北させようとしている。

新植民地主義は、植民地主義が長い期間にわたり精力を傾け、その存在と影響力と利権とを保持しつづけてきたあの経験と知力とを、じゅうぶんに利用しているのである。

7　ベトナム、キューバ、ドミニカ共和国での経験は次のことを示している。すなわち、アメリカ合衆国は、これらの現代的方法を駆使した植民統治に先敗した場合には、その影響力や市場利権を守るために、たちまち旧来の軍事侵略、軍隊上陸の姿にたちかえるであろうということである。

こんにちパレスチナ人民は、土地と自由を回復するために解放闘争にむけて進撃しているが、それによって統一的な帝国主義陣営と対面しているのである。帝国主義陣営は優越した技術をもち、戦闘や革命を骨抜きにする術にたけているし、また他の勢力のかげに隠れているが、カイライ勢力がもはや人民の運動をおさえることができないとみるや、ただちに直接的対決に出る用意がある。そして懸命に民族解放運動を世界の革命陣営から孤立させ、また核戦争の脅威によってソヴエト同盟の努力を無効にしようとしているのだ。

実に、六月戦争やその前後に起きた事件は、こうしたことの具体的なあらわれにほかならない。アメリカ合衆国は、アラブ解放運動を封じ込め、それととりひきして、それが世界の革命陣営と組織的に連合しないようにした。それからイスラエルとその軍事力を使って、この解放運動を切り崩し破壊しようとした。そしてその後再び、それが弱体化している間に封じ込めようとしたのである。こんにちアメリカは、イスラエルにその権力のあらゆる必要物を提供することによって、この解放運動を封じ込め破壊しようとたくらみ、その意のままにしようとしている。

こうした状勢にたいして、パレスチナ・アラブ解放運動は、次のことをしなければならない。(1)明確な見通しをもつこと。(2)すべての力を動員すること。(3)そのような動員を確実にする政治的、経済的、軍事的綱領を作ること。(4)敵の技術的優越にうち勝つために人民解放戦争路線を採用すること。(5)全世界のあらゆる革命勢力としっかりと同盟すること。以上である。

こうした有効な団結によって、すべての抑圧された反帝国主義勢力の陣営を作りだせるのである。そしてそれによってわれわれは、帝国主義が現段階では強力であるにもかかわらず、それをうち破ることができるのである。

われわれの第一の友は、奴隷状態にある人民である。かれらは帝国主義のために苦しんでおり、その労働も富も帝国主義に収奪されている。またこんにちのアメリカという脅威に代表されるように、ひとたび立ち上ろうとする人民に対しては容赦なく打撃がふりおろされるという危険のもとで生活している。アフリカ、アジア、ラテン、アメリカの人民は、悲惨、貧困、無知、後進性の生活に苦しんでおり、それは、植民地主義と帝国主義がもたらしたものである。今日、世界で経験される主要な紛争は、搾取する世界帝国主義と、人民および社会主義陣営との戦いである。パレスチナ、アラブ民族解放運動は、ベトナム解放運動、キューバ、朝鮮民主主義人民共和国の革命的戦いなど、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの民族解放運動と同盟することによってはじめて、帝国主義陣営と対抗し勝利する陣営を創出することができるのである。

パレスチナ、アラブ解放運動は、すべての低開発で貧しい国々の民族解放運動と連帯して、アメリカ合衆国を先頭とする世界帝国主義と対決するなかで、われわれを支援しその抵抗の中を増援する強

力な味方を見出すことであろう。その味方とは、中華人民共和国である。実際それはわれわれと同様に、それを封じ込め孤立させ、その発展を妨げようとしているアメリカの脅威と今も対決しているのである。

偉大な中華人民共和国は、いまもなお植民地主義と帝国主義がもたらした低開発状態のなかにあり、われわれと同じような危険と矛盾に直面している。だからそれは、現段階では（世界帝国主義と世界人民の）基本的な矛盾が歴史の進展を支配しているという分析に立ち植民地主義に対決している人民と同じように、革命的な解放戦争戦略をとっている。この戦略的一致は、革命的同盟のための具体的な根拠となっている。そしてこの同盟は、われわれに敵と対決し勝利するのに有利な地位をもたらすだろう。中華人民共和国は、イスラエルが、打倒すべき帝国主義の基地だという分析にかんして、パレスチナ、アラブ人民の見解に立っているのである。

アメリカ合衆国は、ソビエト社会主義共和国同盟と東ヨーロッパ勢力が、われわれの解放運動と深く結合するのを阻止しようとあらゆる努力をしており、またこれらの社会主義政権は、イスラエルがその領土を拡張し、侵略を拡大するのは阻止するが、侵略的存在としてのイスラエルそのものは問わないという限定的な立場をとっているのだが、しかしそれにもかかわらず、この社会主義陣営の立場と、わが国に居すわる帝国主義やシオニズムの間には一定の矛盾が存在しているのである。この矛盾は、われわれがこれらの社会主義政権と同盟できる基盤をうみ出している。そしてパレスチナ、アラブ解放運動の拡大を通して、またその敵との決定的な衝突を通して、この同盟の基盤を広げ、これらの政権がわれわれの解放運動を、その究極の目的にいたるまで支持するようにさせることが、われわれの任務

である。

こんにち帝国主義と反動勢力は、パレスチナ、アラブ民族解放運動と、ソ連や社会主義陣営諸国との間に、くさびを打ち込もうとしている。帝国主義がこの目的を達成しないように警戒することは、われわれのつとめである。これまでずっとソ連は、わが國における帝国主義の企てや計画に対して戦う時、いつもアラブの大衆の主要な支持者であった。

こうしたあらゆる同盟によって、われわれは、戦いで結び合った敵と対決する陣営を創り出すのである。

こうした一連の基本的な革命的同盟と共に、われわれは、われわれの戦闘や政治的努力を重ねて、またわれわれの戦いの性格を民族解放闘争の一環として鮮明にすることを通して、ヨーロッパ、アメリカ、また全世界のあらゆる解放勢力をわれわれの側に引きつけなければならない。

このような国際レベルでの戦略によって、われわれはイスラエル、シオニズム、帝国主義を封じ込めることができ、全世界のあらゆる革命勢力を動員して、われわれの戦いの味方とすることができるのである。

以上のような展望を描くことは、現段階のパレスチナ、アラブ解放運動の実情に照してみれば、夢想的に見えるかもしれない。しかし不断に革命的活動を実践し、真に不屈の偉大な革命にまで解放運動を高めていく努力は、きっとそれを実体化し具体化させることであろう。これらすべての同盟関係は、単に倫理的共感だけでなく、実のある有効な支援となるものである。そしてそれによってわれわれは、確固として、勝利できる能力を創り出せるのである。

以上によって、パレスチナ、アラブそして世界レベルでの敵と味方の図表が完成する。この図表についての明確な理解は、われわれの心からの戦いに対する皮相な見方を一掃するであろうし、それはまた、戦いの規摸、勢力、一般的枠を決定し、さらに、現時点での人間の歴史を支配している歴史的、弁証法的な運動の中でその戦いがどんな地位を占めているかを決定することであろう。

第九章　帝国主義の技術的優位に対して

どのようにして弱い人民は、帝国主義の技術的優位に対抗できるのか

イスラエル、シオニズム、帝国主義、アラブ反動派に代表される敵陣営と対決するにあたっては、われわれは、戦略的に、パレスチナ革命の勢力を、パレスチナ、アラブ、全世界にわたって総結集することを目ざすものである。それによってわれわれは、敵に対してその規模や数の上でまさる革命陣営を形成できるのである。しかし勝利するためには、これだけでは不充分である。敵が強大である主要点は、その科学技術面での優位性である。そしてこの優位は、われわれが革命戦争で直面する時の敵の軍事力に強く反映している。われわれはどうしたら、この敵の優位に対抗し勝利することができるのか。

敵が科学的、技術的、文化的に優位に立っていることは、単なる軽い問題でも、第二次的な性格のものでもない。その優位は、まさに軍事面にあらわれるものである。すなわち敵は、その動員を敏速に行い、その規模も大きい。また訓練の水準も高く、軍事指導の質も高いのである。また奇襲作戦も

できれば、戦闘の全過程にわたって計画性もある。そしてとりわけ敵は、兵器面や近代的戦争全般にわたって優位性をほこり、電撃的な速さでそれらを制御し使いこなせるのである。

一九四八年、一九五六年、一九六七年の戦争をじゅうぶん科学的に研究するならば、敵の技術文化面での優位性が果した役割はいっそう明らかになるだろう。この優位性が軍事面に反映されたおかげで、これらの戦いは敵の勝利とわれわれの敗北に終ったのである。この三つの大衝突でわれわれが敗北したことについて、身勝手で皮相な解釈を下し、ある偶然の一致やある誤りがなかったならば、われわれは戦いに勝てただろうなどと信じるのは、愚かなことである。

過去五十年間、われわれがイスラエルとシオニズムに苦杯をなめてきた理由は、次の基本的な事実をのけては説明できないのである。つまり、われわれより科学、技術、文化の面で優位に立つ社会や運動を敵にまわして、われわれは弱体で貧弱な政治、経済、社会、軍事構造しかもたず、さらに現在に至るまで、われわれは戦いとその戦略にかんして誤った見通ししかもたなかったことである。イスラエルや帝国主義に対するわれわれの戦いは、敵の軍隊とわれわれの正規軍との通常戦争という古典的な軍事対決の形をとるかぎりは、積極的に勝利を生み出すことはできない。そのような戦争であるかぎりは、イスラエルや帝国主義が勝利するだけである。なぜならば、敵はその軍備の質にすぐれており、近代兵器の操作に長じ、それらを自由自在に電撃的に使いこなす。そしてそれらを支える経済力をもっているから、敵はわれわれをうち破れるのである。三つの経験は、われわれにとって十分な教訓である。今日、非常に電撃的な形をとっている通常戦争は、敵にその圧倒的な技術的優位性を発揮させる戦争様式であり、またしたがって、低開発社会のあらゆる弱点があらわになる戦争様式である。

そしてわれわれがソ連に頼ったところで、この科学、技術、文化の水準でのギャップは、埋めつくせるものではないのである。これは、「近代兵器とその調達」といったような問題ではない。基本的に必要なのは、兵器やその調達を十分に理解でき、能率的に使いこなせる人の要素である。そしてこれは、兵器をあつかう人間の技術的科学的水準に依存している訳である。この点で、今のところわれわれはかんばしいとは言えない。その結果、われわれは従来の通常戦争によって、イスラエルと対決する立場にはいない。（そしてイスラエルの背後にはアメリカ合衆国がひかえており、万一戦局がわれわれに有利に展開される場合には、自国の軍隊を投入しようと待ち構えているのである。）帝国主義の優勢な軍事力と対決するにあたって、弱い人民が使用すべき武器は、近年来、解放闘争を戦い帝国主義を打倒し、勝利をかちとっている各人民の経験の積み重ねのなかで、よく知られるようになってきている。すなわち、帝国主義の技術的軍事的優位に対して、弱い人民は、ゲリラ戦争や人民解放戦争でもって対抗しているのだ。ゲリラ戦争によってわれわれは、敵との正面衝突を避け、それによって敵が、わが勢力に対してその十分な技術的な優位を発揮できないようにし、また電撃的には勝利できないようにするのである。敵の弱点を攻撃してはすみやかに撤退するという具合に、敵との直接的衝突を回避しようとするゲリラ闘争は、われわれの全勢力を敵と対決させることなく、われわれを、その卓越した機動力と致命的な兵器によって打破させることなく、毎日、敵の小さな損害を蓄積させていくのである。このようにして敵は、その基本的な優勢を失ないはじめ、力のバランスが、はじめはゆっくりとしかし時と共に急速に、武装革命勢力に有利に変り始めていることを、感じさせられるのだ。ゲリラ戦争を持続していくにしたがい、味方の勢力は増大し、戦争という芸術の中で経験をつみ、

技術をみがき、戦力をあげ、ついには敵の数個部隊を相手に戦闘を遂行できる兵員とを獲得するにいたるのである。こうしたサイクルは、複合的なゲリラと人民戦争の開始によって始まるのだ。革命が拡大し、敵軍の苦悩が増大して、敵があらゆる町や村に、すべての国境線上にそって、その勢力を分散させることが必要になるにつれて、戦いは大規模で効果的な戦争に変りはじめるのである。

われわれは、ゲリラ戦争によっては、敵を完全に除去して、十分な解放を達成することはできない。しかし、ゲリラ戦争は長期戦への第一段階である。革命の軍隊は、次のような条件によって敵の優位にうち勝つことができるであろう。すなわち、それは政治意識をもつこと、また、それを支持しそれに必要な人的物的資源を供給する組織された大衆と結合していること。また全世界の革命勢力と同盟していること。それは支持と援助をさしのべてくれるであろう。また戦いを通して経験をつみ実力をつけていること。そしてまた、戦いに明確な見通しを与え、あらゆるレベルですべての革命勢力と組織的な連携をもたせる革命党と結合していること。以上である。イスラエルと帝国主義は、わが祖国で圧制、屈辱、悲惨、搾取をほしいままにしてきたが、その年月の中から生れてきた英雄的な決意をもってすれば、革命の軍隊は、敵の優位に対して勝利することができるであろう。

ここでわれわれは、長く非常に複雑な戦争に関する軍事計画を作成しようという意図はないが、われわれが、優越した科学技術と能力をもったイスラエル、シオニズム、世界帝国主義と対決している低開発国人民であるという事実に照してみて、この戦争が帯びるであろう一般的形態について、一般論を述べておこう。

われわれは、人民解放戦争方式を提起する。そしてわれわれは、一九四八年、一九五六年、一九六

七年の各戦役で採用し、その度に敗北してきた従来の通常戦争方式には反対である。

ボー・グェン・ザップ将軍は、その著書、「人民の戦争、人民の軍隊」の中で次のように述べている。「力のバランスは、敵に対してわれわれの方が弱いことを、明らかに示していた。だからベトナム人民の解放戦争は、勝利の条件を作りだすためには、困難で長期にわたる戦争でなければならなかった。あらゆる速勝を目ざす観念は、忍耐力のなかから生れたものであり、はなはだしい誤りにすぎなかった。長期抗戦の戦略をしっかりつかむことが必要であり、敵の力を少しずつかじり、次第に破滅させていく一方、われわれの力を次第に増大させるために、自力でやりぬく意志を高揚させることが必要である。何千もの小さな勝利を積み重ね、それを偉大な勝利に変えていくことが必要である。このようにして、われわれは徐々に力のバランスを変えて行き、われわれの弱さを強さに変え、決定的な勝利を達成するのである。」

ザップ将軍は、同じ本の他の節で、次のように言っている。

「作戦を指揮する観点からみて、われわれの戦略と戦術は、人民戦争と長期抗戦の戦略と戦術でなければならない。」

「ベトナム人民の解放戦争は、次のことを立証した。すなわち、不十分な装備しかなくても、正しい道理をもって闘うならば、人民の軍隊は、適切な戦略と戦術をもって、帝国主義の近代的な侵略軍にうち勝つに必要な条件を兼ねそなえることができるということである。」

「ベトナム人民の解放戦争が残虐で強力な敵に対して勝利するためには、全人民を、労働者、農民の同盟を基礎とした広範で確固とした民族統一戦線に結集することが必要である。」

毛沢東は、『人民民主主義独裁について』という論文の中で、次のように言っている。

「規律ある、マルクス・レーニン主義の理論で武装した、自己批判の方法をとる、人民大衆と結びついた党。このような党に指導される軍隊。このような党に指導される革命的諸階級、革命的諸党派の統一戦線。」

われわれがこれらの文章を引用したのは、それらが、世界帝国主義に対して、ずっと今も対決しているすべての民主主義的民族解放革命を今日指導している基本的な政治思想の内実を示しているからである。

「革命理論」、「強力に組織された党」、「労働者と農民による革命の指導」、「広範で信念に燃えた民族統一戦線」、「人民解放戦争と長期抗戦」、これらは、現代帝国主義の時代には民族解放運動と民族民主革命の政治戦略的スローガンである。

第十章　パレスチナ解放戦争の目的とその重要性

イスラエルが最初から侵略的存在であったことは、議論の余地もない事実である。イスラエルが出現したことによって、われわれ人民は、そこに住んでいた土地と家屋から追放され、これまで営々と築き上げてきた全てを奪われた。追われた人々はアラブや全世界に離散したが、そのおおくは、ヨルダン、レバノンなどに点在する難民キャンプで、貧困と悲惨にあえぎながら、夢も希望もない生活をおくっている。

イスラエルがアラブの国土とその所有者をないがしろにする侵略的植民地主義者達の牙城であることは、議論の余地ない事実である。それはわれわれにとって明確な体験であり、その前ではあらゆるもっともらしい主張や申し立ては色あせてしまう。パレスチナの中のユダヤ人の「民族的ホーム」(National Home)は、一九四七年に国際連合が採択した分割決議の境界線内で、「イスラエル」となった。それからそれは、その国境を六月戦争に至るまで拡張し続け、ついに一九六七年の六月戦争では、シナイ半島やゴラン高地のみならずパレスチナ全土を含むまでになった。

イスラエルは、わが国土内の帝国主義や植民地主義の基地でありそれは革命の流れをせき止め、われわれの従属を持続させ、われわれの富や労働の産物を略奪し搾取するために利用されている。このことは、議論の余地がない自明の事実である。これは単なる理論上の結論ではない。一九五六年のイギリス、フランス、イスラエル三国連合のスエズ侵略戦争、一九六七年の六月戦争で見たように、われわれの国土にイスラエルが存続しているかぎり、われわれが経験しなければならない事実である。

しかし解放戦争の真の性格は、いくつかの要因により歪曲されてきた。まず第一に、シオニズム運動の高揚は、ヨーロッパでのユダヤ人の迫害と切り離して考えられないという事があり、さらには、イスラエルの誕生は、第二次大戦中のナチスのユダヤ人に対する虐待行為をめぐっておこったということがある。これらに加えて、帝国主義とシオニズムの影響力は大きく世界を支配していたし、またイスラエルの中には、進歩的で社会主義的であり、ソ連や社会主義諸国がイスラエルの建国を支持するように主張した勢力が存在していたことである。これらすべてやパレスチナ、アラブの一部の指導者達が、イスラエルに対する戦いの提起の仕方を誤ったのとがあいまって、われわれの解放闘争の

本質は歪曲されてきたし、なお多くの人々に解放戦争にたいする誤った見方を与えている。

パレスチナ解放運動は、ユダヤ人に対して侵略的な意図をもつ人種問題ではない。それは、ユダヤ人に対して鉾先を向けるものではない。その目的は、軍事的、政治的、経済的存在としてのイスラエル国家の解体である。すなわちそれは、わが祖国に対する帝国主義の利権との有機的な関連に基づいて、われわれに対する侵略と領土拡張をおこなっているのである。われわれはまた、帝国主義と結託した侵略的人種運動としてのシオニズムに敵対しているのである。帝国主義はユダヤ人の苦難を利用して、この地域での帝国主義の利益を増大させるための踏み石としている。そしてこの地域は、世界中でも有数の豊かな資源をもち、またアジア、アフリカ諸国侵略への橋頭堡となっているのだ。パレスチナ解放運動の目的は、パレスチナに民主主義的民族国家を建設することである。そこでは、アラブ人もユダヤ人も平等の権利と義務をもった市民として生活できるであろう。そしてそれは、全世界の進歩勢力と平和的に共存しながら、進歩的、民族的なアラブ民族国家の一員となるであろう。

イスラエルは、われわれの戦いをイスラエルに対する人種戦争としてとらえ、あらゆるユダヤ人を排除し、海にほうり込もうとしているという具合に描き出そうとしている。そしてその背後にある目的は、すべてのユダヤ人を、生か死かの戦いに動員することである。したがって、イスラエルとの戦争の基本的な戦略路線は、この誤解をとき、利用されだまされているユダヤ人大衆に呼びかけをおこなって、平和的に生きたがっているこうした大衆の利益と、シオニズム運動やイスラエル国家の勢力の利害には、対立があるということを、さし示すことを目的としなければならない。この戦略路線によってはじめてわれわれは、イスラエルのファシスト勢力を、全世界の進歩勢力から孤立させることができるのである。またそれは、解放のための武装闘争が発達し、その本質が明らかになっていくにしたがって、イスラエルやシオニズム運動の側と、他方の利用されだまされている何百万ものユダヤ人大衆との間に、客観的に存在している予盾を確実に拡大させていくことであろう。

パレスチナ解放運動は、侵略勢力と帝国主義に反対する進歩的な民族運動である。帝国主義の利権がイスラエルの存在と結びついているという事実によって、われわれのイスラエルに対する戦いは、帝国主義に対する戦いになるであろう。そしてパレスチナ解放運動がアラブ解放運動と結合することによって、われわれのイスラエルに対する戦いは、一億のアラブ人民の為に団結してその総力をあげる戦いとなるであろう。こんにちパレスチナのための戦いと、それに、ともなう客観的情勢は、それと結合したアラブ革命のあらゆる目的を実現するための序曲である。それは、広大な歴史的運動である。それは、人種の歴史の現時点で、新植民地主義や帝国主義に代表される邪悪な侵略と搾取の力に抗して、広大な世界を舞台に一億のアラブ人民によって着手された運動なのである

最後に、パレスチナとアラブの大衆に関して言えば、パレスチナのための戦いは、現代文明への足がかりとなるものであり、低開発の状態から近代化への過渡期を形成するものである。戦いを通してわれわれは、時代の真実について政治的自覚をえるであろう、そして幻想を投げ捨てて真実の価値を知るであろう。服従や隷属、個人主義や部族意識、怠惰や無政府性、また一時的な衝動として知られる低開発状態の悪習は、戦いを通して、時間や秩序、正確さや客観的思想、団体行動、計画性、広範な動員力などの価値を、認識することに変るであろう。また、学問的研究、あらゆる武器の獲得や習得、人間の価値の自覚、そして、社会の半数を占める女性の因習や伝統のくびきからの解放などが、

生まれるであろう。そして、危機に直面しては、民族的結合が基本的に重要であり、氏族、部族、地域の結合よりも、まさっていることなどが認識されるようになるであろう。

われわれの長期にわたる民族解放闘争とは、われわれが新しい生活の道に入ることであり、それは、進歩と文明への門戸を開くことになるであろう。

第十一章　戦略論のまとめ

だいたい以上が、われわれのパレスチナの解放戦略的展望である。パレスチナ解放人民戦線（PFLP）は、この戦略を、活動の一般的指針として採用するものである。しかしわれわれは、理論的な分析が正しいかどうかは、それを実際に適用してみて成功するかどうかにかかっているということを強調しておかなければならない。どんな政治的理論的分析であっても、それが正しいか誤っているかということについて科学的な答えが出せるのは、革命の経験を通してのみである。そしてどんな理論や分析も、最初から物事を、十分に理解して見通しを出せるものではない。思想と革命的実践の関係は、弁証法的な関係である。思想は革命的実践を導き、今度はその実践結果や反作用をもたらして、物事の理論的見通しに影響を及ぼすのである。こうしたことにもとづいて、われわれはこれらの戦略綱領をわれわれの実践の指針として主張すると同時に、われわれはそれらを固定した不動の物と考えるものではないと強調するのである。経験自体がこの見通しを深め、形づくり、またそれを豊かにし、ある面ではそれを完全なものにするであろう。それはまたこの見通しを発達させ、ある面ではそれを修正

するであろう。戦略にかんするこうした見方は、科学的弁証法の見方であり、それは不動の硬直性をしりぞけて、時には批判と自己批判をおこない、経験から教訓をくみとり、思想と革命的実践との間に有機的な相互作用の連関を確立するものである。そしてそれは、思想を豊かに深めその結果思想はより適切でより正しいやり方で実践の指針となるのである。実際これ以外のどんなやり方も、観念的で硬直しており失敗に導くものである。

別の観点から言うなら、この戦略は戦いの一般的展望やその主要傾向を示しているのみであり、したがって、戦いのあらゆる段階について来れる迂余曲折や内的関連にかんしては、細部にわたって述べられてはいない。例えば、主要な敵と味方の対立を定義するにあたって、われわれは敵勢力自身や革命勢力の隊列内部で相互に作用している対立点にかんしては留意していない。だからわれわれが敵勢力の一つとしてイスラエルを定義したとしても、それはこの国を静的なものとして描こうということではない。イスラエルは、その内部に紛争の余地をもたないような同質的結合を示しているものではない。イスラエルの内部にも一つ以上の政治―社会勢力があり、これらの勢力の間には対立があるだろう。これらの対立は、戦いの進展段階にあわせて、時には激しくなったりまた弱くなったりするのである。現在イスラエル内部にあるいわゆる「タカ派」と「ハト派」との対立は、戦いの方にはとりたてて影響をもたらせていないが、しかし今は潜伏していても、いつかはもっと激しい対立となって現われてくることもあるだろう。同時に、われわれがイスラエルと帝国主義には有機的な関連があると言ってもその間に潜在的で部分的な対立がないとは言れない。更に現在われわれは、イスラエルとヨルダン反動政権との対立があることを知っている。　そしてヨルダン政権は、時にはわれわれ

抵抗運動との対立よりも、イスラエルとの対立の方を重視することもある。また現在われわれは、占領地域外のパレスチナのブルジョアジーが、抵抗運動を財政的に支援する気がない訳でもないことを知っている。

他方では、また違った一群の対立が存在している。現時点では、パレスチナ武装組織の間に対立があることは明白である。一方、パレスチナ解放運動と、アラブ諸国の革命運動との同盟は、全くスムーズだという訳ではなく、なんらかの対立があることは避けられないだろう。更にその上、われわれが敵と戦うための革命方式として人民戦争方式を提起するにあたっては、次の事実を忘れてはならない。すなわち、まだ長期にわたって、従来の民族政権の軍隊は、戦術的攻撃や防衛にあたって、その軍事的役割を果すであろうということである。その軍隊は、イスラエルや世界帝国主義には勝つことができず、長期戦略的に見て勝利するためには、急進的な民族解放革命を完成しなければならないのだが、それでも時にある段階では、革命勢力として指導的役割を演じることもあるであろう。

この戦略によって引かれた主要な対立線は、それぞれの側に二つの対立勢力が立っているというような、まっすぐな幾何学的な線ではない。それは実際には、弁証法的に折れ曲った線であり、そのどちらの側にも敵と同盟している勢力が一群となって共存しているのである。時にはこの同盟がより強力になることもあり、別の時にはその対立がもっと顕著になることもある。そしてそのために時々、主要対立線の両側で、流動的で複雑な様相があらわれるのである。戦いのあらゆる段階で、われわれが科学的にその戦術を決定できるように、状況を詳細で正確に把握することは基本的に大切なことであるが、同様にあらゆる戦いの段階を通じて、詳細な戦術的見通しは、長期的な戦略的見通しのもとにたてられなければならないということは、また基本的に大切なことである。われわれはこの戦略的な見通しによって状況に流されず、またそれにただ反応するのではなく、また誤った実験的こころみや衝動的な行動におちいらずに、戦いを指導できるのである。

現在、パレスチナ解放人民戦線は、解放戦争に直面しており、またそれを準備しているところであるが、以上のようなことを踏えて、この政治的、戦略的分析を、その実践の指針として採用するものである。

第二部　組織論

第十二　組織戦略

帝国主義は、高度な技術、生産力、経済力をもって、長いあいだ人民を植民地化し搾取してきた経験をもっている。またその間、人民の運動を抑圧し革命を骨抜きにしてきたが、その技巧は時と共に発展し新しくなってきている。だからそうした帝国主義に反対する人民解放戦争は、自然発生的なりゆきまかせのやり方ではやって行けないし、また持続して最終的な勝利をかちとることもできない。このような戦いを担い勝利に導く革命党の存在こそが、この時代の真に根底的な革命をめざすわれわれにとって、必要不可欠な条件である。勝利する革命党とは、戦いの正しい展望を出し、また戦いに加わってくる各勢力の弱い所や強い所を客観的に分析した上でその戦略、戦術を決定する党である。このような革命党は、戦いの指導権をとり、大衆すべての能力を戦争に勝つという目的を達成するために動員し指導するものである。このことを考慮してみるならば、党の諸問題（党についてのわれわれの理解、その構造の基礎、その階級構成、その工作技術、その機構、その基礎を支配している諸関係、党と大衆との関係や指導の問題）は、もはや第二義的なものとしておくことはできない。ここに組織戦略は、戦いの戦略や見通しの中で、欠くことのできない部分になるのである。ここしばらくの間、ラテン・アメリカの革命勢力（カストロ主義者の諸党派）と、ソ連派や中共派の共産党との間に

生じている理論闘争は、主として革命を指導する革命党の構造に関する問題をめぐってなされている。アラブ世界での左派国民党や共産党がだめなのは、これらの党自体がだめだったからであり、すなわちその組織構造、その採用した戦略が失敗だったからであって、決して、革命のためには党が必要条件であるという原則そのものが誤っている訳ではない。今世紀にあらわれたどんな革命も、それを指導する党、それにイデオロギー的、社会階級的基礎を与える党があってはじめて、成功し、勝利を持続し、社会の根底的な変革を達成して、大衆に新しい生活をもたらすことができたのである。そして革命は、そのような階級的基礎によってはじめて、自己を支え、客観的に存続できるものなのである。

第十三章　革命理論なくして革命党なし

革命党組織の基礎は、それが信奉している革命理論である。この理論がなくては、党は単なる自然成長的で経験主義的な活動集団になってしまう。そしてそれでは、諸事件を制御できる勢力になることはできない。革命理論とは、諸事件や諸現象の理解や分析にあたって、明確な見通しをもち科学的な方法をもつものである。

マルクス主義は、人間性と時代にかんする全問題を、科学的で革命的な方法で提起する革命理論である、人類が知識を獲得しようと努力してきた歴史の中で、マルクス主義は、自然、生活、社会、歴史の理解に独特な試みを示している。マルクス主義は、自然とその運動、その運動を支配している法

則を分析し解明する理論（弁証法的唯物論）を提起している。そしてそれは、一切の幻想、迷信、主観主義的考察、空想や、単なる言葉の上だけの机上の空論を排して、明確で科学的な唯物論的方法をとることによって生れるのである。それからそれは、この明確で科学的な唯物論的方法を、社会とその運動、歴史発展の研究に適用している。（史的唯物論）そして特にそれは、近代資本主義社会の形成や構造、その予盾や運動の研究に重点をおいている。（剰余価値論と科学的社会主義）これらすべてを通じて、マルクス主義は科学的な弁証法的方法を提起して、歴史、社会、政治現象の研究を科学のレベルに高めたのである。自然科学が、自然現象を制御し、それらを人間のために利用するために、人間が生みだした手段であるのと同じように、マルクス主義は、人間が社会と歴史の発達を理解でき、それらを導き影響を与えられるようにする科学である。レーニンは、集中、独占、植民地主義の段階へと進化していた資本主義の研究に同様のマルクス主義的方法を適用し、また同様の方法で、20世紀の初頭に起ったあらゆる政治現象やでき事を解明することによって、マルクスの科学的な努力を完全なものにした。

またレーニンは、マルクス主義とその科学的社会主義の方法にもとずいて、歴史上最初の社会主義革命を成功に導き、その戦略を提起し、その諸問題に対処することができた。そしてまた革命を勝利の道に指導する革命党の指導者はどうあるべきかを、身をもって示したのである。このようにしてレーニンは、マルクス主義を革命的に現代に適用し、それによってマルクス・レーニン主義は、人類の歴史の現時点では革命の基準となっているのである。この理論は他のあらゆる科学理論と同じように、現実の実践という実験を経て、その有効性にかんしては試験済みであり、この点でそれは今世紀にいたって科学としての資格を獲得してきたと言えるだろう。つまりなんらかの理論や法則が正しいかどうかの最終的テストは、実践とその理論法則が矛盾しないかどうかによって決る。そしてマルクス主義の場合は、まさにこの条件を満足させるものである。十月革命、中国革命、キューバ、ベトナムその他の世界中のあらゆる革命的経験は、本来この理論の力で生れたのである。このことは、この展望、理論、指針に基づかなかった革命的試みが、いずれもつまずき混乱して、崩壊してしまったこととよい対照をなしている。その政策の立案や計画決定の指針として、科学的社会主義の理論を採用していない第三世界の国々が、半ば麻痺症状を呈しているのに対して、十月革命、中国、キューバ、北朝鮮、ベトナム、東欧の社会主義諸国の革命が勝利して、帝国主義にしっかりと対決し、自分達の低開発状態を克服するか、克服しているのは、単なる偶然の一致ではないのである。

今世紀に起った革命や事件を、明確に唯物論的な視点から科学的に研究してみるならば、マルクス主義理論の正当性が具体的に分るであろう。

マルクス主義が革命の理論的武器となるためには、一方ではそれがどのように理解されるかにかかっており、他方では、それを特定の状況や段階へ正しく適用するかどうかにかかっている。マルクス主義の本質は、物事を分析し見通しをたてたり、その運動方向を決定したりする方法の中にある。だから、マルクス主義を革命的に理解することとは、活動の指針としてそれを理解するということであって、固定された不変の教条として理解することではない。レーニンや毛沢東そしてそれ以前のマルクス、エンゲルスが何度も強調したことは、マルクス主義者は教条主義におちいってはならず、活動の道案内人にならなければならないということであった。

人間社会に関するマルクス主義的観点の神髄は、社会は不断の運動、変化の過程にあるということである。したがって、マルクス主義によって提示される社会分析は、常に新しく生起する段階や事実に即しておこなわれる。マルクス主義の中の不変の要素とは、不断の運動と変化の状態にある物事を見るにあたって、それがもちいる弁証法的で科学的な方法である。この方法こそ、マルクス主義の本質なのである。われわれは、マルクス主義という革命的な理論的武器があるから、不断に流動し発展し変化する物事に対して、科学的な展望をもつことができるのである。現代資本主義は、マルクスの時代の資本主義とは同じものでなく変様してきている。また階級構造についても、後進社会のそれと高度産業社会のそれとは同じものではない。またヨーロッパのブルジョアジーは、自分達の利益の維持のために、民族主義を表明し利用しているが、それは後進国に現われる民族主義とは同じものではない。後進国の民族主義は革命的な概念を獲得しており、それは、資本主義の段階としての帝国主義に反対して、隷属している人民を動員するための体制となっているのである。

こうしたあらゆる差異を考慮し、今世紀におこった革命によって提供された新しい革命理論から有益なものをくみとり、またマルクス主義を時代おくれの化石にするかわりにますます豊かに発展させるようなあらゆる理論的努力から有益なものを学ぶのだ、といった風にマルクス主義を理解することが、真の科学的マルクス主義者の道である。この反対は、マルクス主義を固定した教条として受け入れようとする態度である。

マルクス主義的概念における理論とは、常に現実や実践との不断の弁証法的関係の中に存在する。その理論が実践との弁証法的な関係の中にあるという事実は、それが成長、進歩、修正の状態にあって、固定された状態にはないということである。

マルクス主義を信奉するわれわれにとって最も危険なことは、それを理解するにあたって、機械的、観念的になるということである。それでは、マルクス主義は生きた現実を理解できなくなってしまう。われわれがマルクスやレーニンの書いたものを読み理解して得られる利益は、それらの書物にあらわされた知識の限度に限られたものである。一方、われわれがこれらの著作を深く自分のものとすれば、その時われわれは、社会、歴史、革命運動の問題を理解し解明し、それと対決するにあたって、マルクス・レーニン主義によって提起された方法を自分のものにすることができるのである。そしてそれこそが、真に得られる利益なのである。分析の手段としてのまた活動の指針としてのマルクス主義こそが、われわれの武器となるのであるが、それは、こうした理論を血肉化することによって獲得できるのである。だからマルクス主義を信奉したとしても、その信奉が、この理論をもちい適用して現実の状況を理解し、活動の戦略を明確に定めることにならないとすれば、それは何の効果も生み出さないことであろう。現状を理解し、実際の戦略をたてることが、一切を決定するのである。すなわち、時期の性格や戦闘の性格を決定し、また敵対勢力を見極め、われわれの運動の具体的状況を十分に理解できるのみならず、敵対勢力の運動にかんする見通しをもたてられるようにするのである。マルクス・レーニン主義理論を、われわれが現実に生きている状況やわれわれの戦いに適用することによってのみ、はじめてマルクス・レーニン主義を信奉することが意味のあるものとなり、成果をもたらすものとなるのである。なにもマルクス・レーニン主義は魔法の杖ではない。マルクス・レーニン主義の信奉を単に宣言することが、われわれの前に勝利の道を開くことになるだろうと夢想するなら、そ

れはとんでもない誤りである。中国やベトナム革命の場合のように、マルクス・レーニン主義が革命を代表している例もあるが、他方では、マルクス・レーニン主義の信奉が何の指導も発揮していない例もあるのだ。アラブの共産党は、形式上マルクス・レーニン主義を標榜するが、わが祖国の革命を領導することはできていない。なぜならば、その言明は単に言葉だけのものにすぎないか、または、彼らがその理論を化石のように硬直したものとして理解しているからであり、また、戦いの明確な見通しや、指導のための正しい戦略を導きだせるように、現実の状況にこの理論的武器を適用できていないからである。

科学的社会主義の理論は、まず第一にわが党の指導部によって十分に理解され、更に党内のすみずみにまでゆき渡らなければならない。そうでなければ、われわれがその理論を信奉していると言ったところで、それは単なる言葉の遊びであり、単なるまやかしか現実逃避になってしまうであろう。このような深い理解は、偉大な研究の努力を長期間つくさなければ得られるものではない。他方ではこの理論を標榜する価値があるかどうかは、われわれがこの理論を硬直したものとしてではなく、分析の手段として、革命運動の問題をとり扱う方法として、活動の指針として理解するか否かにかかっている。マルクス、レーニン主義的方法を獲得することが、この努力や研究の目的でなければならない。さらにわれわれがマルクス、レーニン主義を標榜する価値は、結局、革命の戦略、戦術を定式化する目的で、われわれの戦いの状況にこの方法を適用することの中にあるのだ。そしてわれわれがマルクス、レーニン主義の信奉をこのレベルに高めないならば、それは、インテリ達のおしゃべりのための理論と化し、戦いの明確な展望をきり開く革命党の理論とはならないのである。結局、この理論が有

効性を発揮するか否かは、この戦略を正しく適用するために果さなければならない多くの努力いかんにかかっている。もしその努力がなされないのなら、それは日の目を見ない単なる計画だおれに終ってしまうであろう。

マルクス、レーニン主義を信奉することは、こうした意味や成果をもち、それは、わが人民大衆の間に左翼的な革命思想を広げていくことだろうし、またこの思想によって、多くの障害を乗り越えていくことができるようになるであろう。わが人民大衆は、純粋の理論的見地から、この科学的社会主義が正しいかどうかを評価するということはないであろう。かれらのこの思想に対する立場は、自分達の敵や搾取に対する戦いの中で、この思想が明確な成果を示す時に、定められることであろう。この思想が、ちょうどベトナムで起っているように、パレスチナとアラブ世界を人民解放戦争の舞台にかえてゆき、わが国のイスラエルーシオニズムー帝国主義ー反動派の存在を動揺させることに成功していけば、大衆は、この理論が自分達の敵に反対する戦いに際して最も強力な武器であると悟ることであろう。このようにして、現在この理論にたちふさがっているあらゆる障害は、現実的なものであれ、非現実的なものであれ、一切消滅するであろう。

現在、わが大衆の間に広がっている思想は、反動派と植民地主義が優勢なために、右翼的思想である。さらにその上、共産党の失敗、すなわち統一や民族主義やイスラエルを論議するやり方の失敗と同じように、大衆について論じるかれらの態度の誤りは、大衆の心に、マルクス主義思想とこれらの態度との間に混乱を生じさせてしまった。これらすべてに加えて、反動派や植民地主義者は、常にこの思想を歪曲し、それを大衆の民族的感情や伝統と相容れないものとして、描き出そうとつとめている

のである。

最後に、未熟で小児病的な左翼も、この思想を歪曲して大衆に示しているのである。かれらは、大衆に理解できないようなやり方でこの思想を話し、また大衆にとっては、さし迫った問題のとり扱いとしては奇妙にも見えるやり方で、この思想について話すのである。しかし、マルクス、レーニン主義を正しく理解して適用するならば、この思想はわが祖国にその道を見つけるという成果を生みだすことであろう。したがってそれに基づいてわれわれは、われわれの新しい生活やそれに対する科学的理解を生み出し、また新しい現代的価値を創造できるであろう。

こういう意味あいで、人民戦線（ＰＦＬＰ）は、しっかりした理論的基礎をもつ革命党を建設するにあたって、マルクス・レーニン主義理論を基本的な戦略路線として採用するのである。それによってわれわれは、その思想と戦いの見通しを統一し、また大衆を動員して勝利をかちとれるしっかりした勢力にすることができるであろう。

第十四章　革命党の階級構成

党は、その革命理論構成を確保するだけでは十分とはいえず、この理論構成は、その階級構成と一致していなければならない。パレスチナ社会での革命党は、まず第一に労働者と農民という革命的階級の党である。事実、党の構成がこれらの階級に基づいている時、その党は堅固であり、忍耐強く、革命的能力に富み、その立場は健全であるといえる。しかしもしその党の構成やその基本的指導権が

プチ・ブルジョア階級のものであるならば、その党は、科学的社会主義に対する献身性に欠け、優柔不断と煮えきらない不明確な立場をとり、また敵の挑戦にたいしては腰くだけとなりやすいなどというように、この階級の特性を反映することになるだろう。

革命党であることを真に保証するのは、まず第一に科学的社会主義を深く理解し、それに献身的であることに基づき、第二には、それが労働者と農民の組織であることに基づいてである。

このような党の階級構成は、自然発生的に生じるものではない。それには、明確な見通しと、その見通しにそった努力が必要なのである。実際、組織の自然成長性は、プチ・ブルジョアジーの優勢を導くのである。それは、労働者と農民が無力であり、その政治的な階級意識が堅固でないのに対して、現段階ではプチ、ブル階級が有力であり、政治活動に積極的な関心をもっているからである。

現在、政治組織としての人民戦線（ＰＦＬＰ）は、かならずしも、組織の革命性や堅実さを保証し、革命を持続させていく能力を実質的、具体的に保証する抑圧されたプロレタリア階級を主体とした階級構成になっているとはいえない。

戦線（ＰＦＬＰ）の政治組織は、大体アラブ民族主義運動（ＡＮＭ）の組織を、そのまま延長させたような構成である。したがって、その構成としては、プチ・ブルジョアジーが優勢である。計画的な努力をしないで、このままの成長を続けていくと、われわれの組織は、いくらかの地方や難民キャンプに少しは広がることはあっても、主としてアンマンやその他の都市に限定されてしまう結果となるであろう。

われわれの組織計画は、その最も有能な指導部分を難民キャンプや村に配置することを目的とした

ければならない。そしてそのためには、農村地域や難民キャンプを概括的に調査し、これらの地域に拠点を作ることが必要なのである。またこれらの地域から起き上ってくる若者達を把握し、かれらを理論と組織でしっかり育てあげることが必要なのである。それによってわれわれは、多くの指導的党員を、革命に忠実な階級から獲得できるのである。都市には数百の党員や幹部が存在する一方、われわれは多くの村や難民キャンプや労働者の拠点とは何の関係ももっていない。いかにそんな拠点が少ないとはいってもである。しかしこの事実は、われわれの組織の発展が自然成長的であり、また革命の見通しが明確でなく、またこの見通しにそった有効な革命的計画がないということを、もの語るものである。だからこれら多くの党員や幹部は、真に革命的な拠点に浸透できるような組織計画に従って、効果的に展開されねばならない。そうしてしばらくたてば、貧しく抑圧された労働者を基礎とした強固な政治組織ができあがることであろう。そしてこういう人々こそが、革命を決意しており、またそれを堅持し、あらゆる試練にあっても動揺しない意志をもっているのである。このようにしてわれわれは、自分達を革命的な組織にしていくのである。その時、わが政党は、戦闘的幹部達の真の支柱となり、かれらに必要とされる革命的な戦闘員を送り込み、幹部と戦闘員との完全な融合をかちとることができるのである。プチ・ブルジョアジーやインテリは、農村や貧民地区に根をおろそうとはしないものであり、そのような人々に基盤をおく政治組織は、戦っている幹部達に必要な戦闘員を送りこんだり、また戦闘員達に支援を与えたりすることはできない。むしろ、実際には戦っている幹部達の足を引っぱりかねないものである。武装闘争に関係をもつようになると、かれらは道徳的特権とか形式にこだわり、指導部の高い地位を求めようとし、また更にかれらは、武装闘争に対して、個人的で

戦術的な紛争や論争を出してきて、無理におしつけようとする。そしてそれらは、実際に戦われている問題とは全然関係のない、言葉だけの争いである場合が多いのである。

当然のことだが、われわれの意図はプチ・ブルジョアジーをしめだす政治組織をもつことなのではなくて、その基本的人材が、労働者、農民、貧しい人々からなる組織を形成することなのである。そうすることによって組織は、強化され堅実になり、規律が保たれ、戦闘問題にたいする現実的で目的意識的な姿勢が生れてくるのである。このようになってはじめて、組織は、その隊列の中にプチ・ブルジョアジーの革命的な部分を動員し結集しても大丈夫になるのである。そしてその時には、プチ・ブルジョアジーの優柔不断や不決断、動揺や気まぐれには、染まらないでも済むのである。

革命的インテリは、党建設と革命にとって、基本的に必要な人的資源である。現代の社会主義思想は、低開発国の革命勢力を規定して、労働者、農民、軍人、そして、革命的インテリをあげている。インテリは革命に明確な見通しをあたえる。そしてインテリが存在するからこそ、労働者階級は、行政や組織形成や活動の全局面での計画化の能力を身につけることができるばかりでなく、政治意識をも身につけるようになるのである。したがって、革命的インテリの存在と、かれらが党組織の中に融合していることは、基本的に重要な問題である。しかし、党建設や革命運動において、インテリが役に立つかどうかは、かれらが大衆や戦闘員の革命的行動と結合しているかどうか、またかれらが実践を通して堅実さを身につけ、実践的な問題の訓練を得ているかどうかにかかっているのである。党内に実践的でないインテリ達が、大衆や戦闘と無関係に存在していると、それは、現実的な活動の問題とは相入れない、むだな声明を党に出させることになったりする。インテリが革命の中で自分の役

割を果せるためには、かれらは、抑圧された大衆や戦闘員の間で生活しなければならず、またかれらに教えると同じくらい、かれらから進んで学ぶ気があり、またかれらと同じ生活環境を分かちあわなければならず、また知的に謙虚であり、戦闘員や貧しい人々と同志的な関係を確立し、そして優越した関係や物質的、道徳的な特権を捨てなければならない。そしてこれらの課題を守らず修練しようとしないならば、そのインテリは、革命運動のためにどんな能力も発揮できないであろう。革命的な戦闘員は、誰にたいしても高ぶった態度はとらないものである。革命の目的の中には、平等や人間の尊厳や同志的連帯や協力ということも含まれている。そして、革命の指導のために建設されている組織には、当然この作風が体現されていなければならない。

革命党建設のためのわれわれの第二の戦略路線は、労働者、農民、苦役労働者、革命的インテリの階級を基盤として、党を建設することである。当然のことだが、この路線を採用するということだけでは、こうした階級構成を十分に確立できる訳ではない。そうなるためにわれわれは、長い間の苦労を覚悟しなければならない。われわれの組織が実際に、労働者、貧農、肉体労働者の組織となる時に、すなわち、ほんとうに難民キャンプや村や都市の貧民地区に根をおろすようになった時に、はじめてわれわれは、安心して強固な組織が作れたと確信することができるのである。そしてその時党は、革命に対してそれが必要とするものを提供し、またそれを防衛し、持続させ堅持していくことができるのである。

第十五章　党と大衆

党は大衆の指導部である。したがって党員とその指導者は、運動への熱意があり、また犠牲をよろこんで受けいれ、規律を守り、規約や組織方針と一致して活動するような意識的な部分から養成しなければならない。党は、その党員が一般に、意識、活動、自己犠牲、規律にかんして、模範となり前衛となるように心がけなければならない。もし党やその党員がこれらの資質をもっていないならば、その党は革命的政治組織としての役割を果していないことは当然である。革命党はそれ自体、意識の面でも活動の面でもまじめで規律を守る人々からなる組織でなければならないが、それは同時に、大衆のための組織でなければならない。すなわちそれは、大衆から生れ、大衆の中で生き、大衆のために戦い、大衆を信頼し、大衆と共に大衆を通して大衆の利益のために、その目的を実現する組織でなければならない。

毛沢東は次のように言っている。

「指導的骨幹の積極性があるだけで、広範な大衆の積極性との結合がなければ、少数のものから回りになってしまう。だが、広範な大衆の積極性があるだけで、大衆の積極性を適切に組織する有力な指導的骨幹がなければ、大衆の積極性はながつづきしないだけでなく、正しい方向に進むことも、高度なものにたかまることもできない。」〔注1〕

われわれが、われわれの運動の中で常にこのことを念頭においておくことは、大変有益なことであ

ろう。党と大衆の弁証法的な関係を理解することによって、われわれは、党の役割と大衆の役割を正しく理解することができるのである。

大衆路線は、わが人民戦線（ＰＦＬＰ）の第三の組織戦略路線である。

大衆組織としての人民戦線（ＰＦＬＰ）の建設をかちとるためには、全党員の心の中に、各々の革命的政治活動の目的が深く根づいていなければならない。われわれの活動の究極的な目的は、大衆である。すなわち、大衆の自由、大衆の尊厳、大衆の生活、大衆の必要の充足、大衆の未来の保証である。

この目的をわれわれは心にとどめ、党員がいっそう深くそれを自覚し、常にそれを念頭におくようにしておくならば、それは、われわれの運動を正しい方向に導くであろうし、またそれを、われわれの運動、組織、指導部、諸活動を評価する基準となるであろう。そしてまたそれは、われわれが、孤立主義や官僚主義、優越意識や日和見主義におちいらないようにしてくれるであろうし、ささいな内部問題にとらわれることのないようにしてくれるであろう。またわれわれの活動の性格や運動の方向をも決めることであろう。

時には、わが党本部やそのある支部は、純粋な内部問題に自己を限定しなければならないことがある。すなわち、それは、会議、学習、論争、批判運動などである。党が指導すべき大衆運動が存在しなかったり、また大衆の諸問題や大衆運動から組織が切り離されている場合には、組織活動は閉鎖的になり孤立して、やがては組織問題や枝葉みたいな論争におちこまざるを得なくなり、その結果、党は革命運動に対して何もできなくなってしまうことであろう。

つねに大衆に気を配り、大衆の問題を処理し大衆のために活動すること、大衆が自分達の問題を理解し分析できるように援助し、その主張をとりあげること、大衆の組織化を支援し、大衆が問題に直面して行動に移らなければならない場合、指導の手をさしのべること。これらのことは、われわれの主要な任務であり、われわれの存在理由である。そしてこうすることによってはじめて、われわれは、われわれの目的を達成できるような革命的力を獲得できるのである。

この作風、意識、方向性がなかったならば、われわれは大衆から分離し孤立したサークルに堕落してしまうのである。そうなれば、まず第一に、組織自体につきものの枝葉のような論争に明けくれるようになるであろうし、第二に、われわれを包囲し粉砕しようとする敵対勢力が生まれてくる可能性が出てくる。

個々の党員、各支部、党全体の性格が革命的であるかどうかは、基本的にそれが大衆路線にのっとって成功しているかどうかにかかっているのである。

すぐれた革命的党員とは、自分の周囲の大衆と最上の関係を確立している党員である。すなわち彼は、回りの人々を助けて目覚めさせることになるのであれば、どんな奉仕もいとわない党員である。大衆に害を与え、大衆から孤立しているような党員は、革命を語る資格などないのである。

大衆路線を具体的にうまく実践している党支部とは、政治的な公開討論をもち、また大衆が直面している諸問題に、大衆と一緒になって反応し、大衆のためになることならどんな奉仕もいとわずやろうとする党支部である。例えば、それは、文盲の兵士のために学校を開いたり、人民の収穫の手伝いをしたり、協同組合の設立を援助したり、また大衆が電力や水道の供給計画や道路の開通を要求でき

るように指導したりすることである。逆に言えば、どんな時にも自己自身に閉じこもっており、その組織内の活動に精をだすばかりであれば、そんな支部は大衆と気脈が通じなくなり、大衆はその存在を忘れてしまう。そんな党支部では、革命的活動の成功は何ら期待できないのである。

革命のためにあらゆる男や女、労働者や農民、学生や若者を総動員する党は、つねに戦闘と革命をめざしており、様々な政治的大衆活動でかれらを指導するものである。大衆のための革命的政治組織とは、その基本組織が学生、労働者、農民の組合や、女性や若者の組織、少年少女団（ピオニール）などに取りまかれている党である。大衆から切り離されているような組織は、なんら革命を語る資格などないのである。

当然のことだが、そのような作風は短期間で生まれるものではない。大衆の動員は、党が目的意識的で規律のある作戦行動に援助できるぐらいの速さで動員されなければならず、自然発生的で無秩序に動員されてはならない。しかし大切なことは、われわれが確乎として、たゆみなき前進をとげ、この大衆路線を堅持していくことである。われわれは、われわれの究極的な存在目的は大衆であること、大衆がわれわれと共にあるかぎり、またわれわれと大衆の間に多くの勢力的かけ橋が結びつけられているかぎり、われわれは大丈夫だということを深く理解しなければならない。更にまた、われわれと無関係になんらかの大衆運動が存在することは、われわれの立場の批判的な再点検を要求する非常警報としなければならないということを、深く念頭においておかなければならない。

党が大衆を指導することはたやすい道ではない。その意志をもつだけでは不充分であり、また党が大衆路線の重要性を主張してその大衆指導を請合うだけでも充分ではない。状況を分析する能力、そ

のスローガン、党が直面している大衆問題の性格、その問題提起の仕方、また党が人民に対して確立している関係の形態、すなわちその動員とその形態、これらすべてのことが、大衆を指導するにあたって、党が成功するか失敗するかを決定する要素なのである。もし党が、大衆の中から生まれてきたものでない議論を提起していたり、また大衆に理解できないやり方で提起したりしているならば、また、党がある種の論点を提起しそこなったり、ためらったりしているようであれば、その党は大衆を指導することはできないであろう。

毛沢東は言っている。

「大衆と結びつくには、大衆の必要と自発的意志にしたがわなければならない。大衆のためのすべての活動は、大衆の必要から出発すべきであって、たとえ善意のものであれ、いかなる個人的願望からも出発すべきではない。往々にして、大衆は、客観的にはある種の改革を必要としていても、主観的にはまだそのような自覚をもたず、決意しておらず、まだ改革の実行をのぞんでいない。そうしたばあいには、われわれは辛抱づよく待たなければならない。われわれの活動をつうじて、大衆の多数が自覚をもち、決意をし、みずから改革の実行をのぞむようになってから、このような改革を実行すべきである。さもなければ、大衆からはなれてしまうであろう。すべて大衆の参加を必要とする活動は、もし大衆の自覚と自発的意志がなければ、いたずらに形式に流れて失敗するだろう。……これには二つの原則がある。一つはわれわれの頭のなかの幻想からうまれた必要ではなく、大衆の実際の必要ということである。もう一つは大衆の自発的意志であり、われわれが大衆にかわって決意することでなく、大衆自身が決意することである。」〔注2〕

われわれは、大衆指導における盲動主義や極左日和見主義の弊害を避けねばならないばかりでなく、同様にわれわれは、怠惰な右翼日和見主義の弊害を避けねばならない。

ここでも、毛沢東は次のように言っている。

「大衆がまだ自覚していないときにわれわれが進撃するなら、それは冒険主義である。大衆がやりたがらないことを無理にやらせるよう指導するなら、その結果はかならず失敗する。大衆が前進をもとめているときにわれわれが前進しないなら、それは右翼日和見主義である。」〔注3〕

大衆路線や大衆の基本的性質が重要だといっても、それは観念的に誤った仕方で理解されてはならない。それは大衆に幻惑をあたえ、客観的な物の見方を曇らせるものであり、また大衆と連帯して指導するかわりに、自然発生的に大衆のあとに追随することになってしまうのである。

他の低開発諸国の場合と同じように、われわれの大衆は多くの時代おくれの概念、すなわち部族とか氏族とか部落的結合にとらわれており、また時代精神から程遠い無政府的な悪習や伝統にとらわれた人々である。こういった状況の下にある大衆では、われわれの規定した敵にうち勝つことのできる勢力になることはできないのである。党がこうした大衆を結集するにしても、革命的政治意識や組織的規律をもたせる努力をしないならば、それは現在の状態のあらゆる弊害を、組織の中にもち込んで来る結果となるであろう。そしてこれはとんでもない誤りである。革命党とは大衆の学校であり、それによって大衆は、自分達の慣習や伝統や概念の多くを変革し、古い陳腐なもののすべてを新しく現代的で革命的なものにとりかえることができるようにするものである。

一方、大衆は、その困難な物質的生活状況にあって、反革命勢力に搾取され隷従させられて苦しみ

をなめているので、戦略的に見ると明らかに、革命が優柔不断や弱気や動揺におちいらないようにする現実的な勢力である。しかしこのことは、大衆が戦術上の政治的立場を定めたり、その綱領を決定したりする際に、常に誤まらないということではない。時に大衆は、かれらの政治的立場から考えてみると、非科学的であり、状況の客観的発展に反するような感情的で衝動的な反応を示すことがある。したがって、党が見通しも効果もないのに、いつも大衆の状況と一諸に進んでいくということは誤りである。つねに党は、「衝動」的な政治行動の危険性について考え、そしてその任務は大衆を指導することであり、大衆の後からダラダラとついていくことではないということを、念頭においておかなければならない。もしそうでないならば、党は、革命政党としての正当な存在価値を失なってしまうであろう。

党と大衆の関係は、弁証法的な関係である。党は大衆を教え、大衆に教えられる。党は大衆に影響を与え、また大衆から影響されるのである。大衆は党に事実を提供する。そして党はこれらの事実を理解し分析して、大衆にその事実の正しい評価を提出し、最後に活動方針を提起するのである。

〔注1〕「指導方法のいくつかの問題について」毛沢東選集第三巻（北京外文出版社版）一六九ページ
〔注2〕「文化活動における統一戦線」毛沢東選集第三巻　二六七ページ
〔注3〕「晋緩日報の編集部の人たちにたいする談話」毛沢東選集第四巻　三二〇ページ

第十六章　戦う党の建設

当然にも武装闘争の戦略は、党形成戦略に影響を及ぼさなければならない。その結果、党の構造は、戦いの要求する利害にもとづくこととなる。すなわちそれは、党の構造、組織の内部関係、その指導部の性格、その教育の題材、その内部規約などに影響を及ぼすといったような具合である。

パレスチナ民族運動の基本目的は、パレスチナの解放である。この目的は、武装闘争と長期的な人民解放戦争によってしか達成できない。もしわれわれがこのことを見落すならば、大きな偏向がわれわれの党と政治活動に生れるであろう。大衆のためのパレスチナ民族運動をうちたてる道は、戦うことによってしかなく、また組織動員と政治活動が求めることは、戦闘を拡大することであるということを、大衆が自覚することを通じてしかない。すなわちそれは、この勝利への唯一の道を大衆が自覚して戦うことを通してしか生れないのである。逆に言えば、戦いを持続的に発展させるためには、戦闘が要求するのにあわせて大衆を動員供給しなければならないし、また戦いの堅持と効果的な発展を確保するためには、市民の隊列をどんどん戦闘に送り込むようにしなければならない。したがって、この戦闘と政治活動を結びつける弁証法的な関係があるかどうかは、われわれの活動を評価する上での正当な基準となるのである。

パレスチナ民族運動の概念には、互いに結びついた戦闘と政治活動という二つの面があると認めることは、組織論上では次の諸点を確認することである。

(1)　戦闘をやる軍事組織は、成熟した政治組織をもたなければならない。われわれの関心を機械的な軍事組織建設に限ることは、多くの危険を生むこととなる。武器をとる兵士は、かれが誰に対して、誰のために武器をとっているのかを知らねばならない。兵士達が大衆との関係について正しい政治的観点をもつことは、かれらが革命勢力から孤立することになるような誤りを犯さないようにするし、またそれはかれらに不屈の能力をそそぎ込むし、また性急な方針をとらせないようにし、また敵の企てた政治的サボタージュ行為が成功しないようにできるのである。更にそれは、武装をすすめているどんな勢力とも正しい関係をもてる路線を定められるようにするし、また戦いに有効で、自分達の支えとなる政治的大衆運動に対しては、一定の距離を保ちながら対応がとれるようにするのである。政治性をもった戦闘員のみが、今日わが人民が戦っているような長くて困難な戦いを、堅持していくことができるのである。軍事的幹部が革命的、政治的見地に立つ時、はじめてかれらは、パレスチナ民族運動の前衛となれるのである。そして戦いは堅持されて、逸脱することはなくなるのである。

(2)　政治組織は軍事組織をもたねばならない。しかし、この組織は戦闘的幹部の補助機関であることを心にとめておかねばならない。この政治組織は不断に、戦闘的幹部となって戦闘に参加する党員を続々と提供するものである。かって生じたわれわれの最大の偏向は、このように完全に明白な目的意識性をもたずに、でたらめに政治組織を建設したことである。その結果は、われわれ自身が、不可欠の部分としての戦闘的幹部組織をもたず、戦いと形式的な関係をもってそれを道徳的、政治的に利用しようとする組織になってしまったのである。このような偏向は、軍事幹部と政治組織の間に、大きな対立を作り出すことになるであろう。そしてそれは、革命の前進に不利な影響を与え、政治組織

は戦いを支援するどころか、反対にその重荷となってしまうであろう。真に戦闘に参加する用意もなく、コマンド・アクションや軍事活動組織と合体することを目的としている政治組織は、革命の発展にとって障害となるし、また党を、戦闘的幹部と政治組織との絶え間のない対立状況にさらすことになるであろう。

政治組織は、常に戦闘に参加していくものとして建設されねばならず、また、その任務は、人民レジスタンス運動などの軍事的防衛運動をやることでなければならない。それは、戦闘的幹部達と同様の条件で生活しなければならず、またその毎日の任務は、戦いと戦闘的幹部達への奉仕のために、常に力を尽すことでなければならない。われわれはこういう風にして、団結した戦う党を建設できるし、戦闘と政治活動をめぐるいかなる深刻な対立をも避けることができるのである。

(3) 結局、党の指導部は、政治＝軍事指導部でなければならない。それは政治意識と共に戦闘を指導する能力をかねそなえなければならないのである。つねに指導部では人事交流がおこなわれ、政治組織が戦闘員や戦争のあらゆる問題や状況について精通して、正しい判断ができるようにし、軍事面での生きた問題を理解することができるようにする必要がある。逆に軍事組織は、政治的分野の活動のあらゆる問題に精通していなければならないのである。

(4) 党内教育は、政治的、軍事的組織の建設を目ざすものである。政治組織に対する軍事教育は、政治教育と同じぐらい基本的なものでなければならない。同様に戦闘的幹部に対する政治教育は、軍事教育と同じぐらいの重要性をもたねばならない。指導的幹部達の訓練は、同時に軍事的、政治的訓練でなければならない。

(5) 指導部の基本的努力は、戦闘の問題の解決や戦闘の拡大と堅持と持久的発展のためになるような課題に向けられていなければならない。すべての組織的、政治的情報や財政的努力は、戦いを犠牲にしてではなく、戦いのために戦いに利するように結びつけられねばならない。そしてこれらすべては、指導部の配置や党全体の綱領、予算、活動形態に反映されることが望ましい。

(6) 党内の規律は、戦闘と政治組織の融合と統一にもとづくものであり、また戦闘員の存在にもとづき、またまさに党内生活としての戦闘という課題や、党の基本的指導部にもとづいて作らねばならない。

われわれが目ざしている組織像は、単一の戦う党である。それは、そのある部分は戦闘に参加しており、他の部分は戦闘を準備しており、第三のグループは、戦闘を守り支える人民の抵抗運動を組織しており、第四のグループは、大衆の中で活動し教宣活動に従事して、戦闘を支える方向に大衆を動員しており、更に第五のグループは、戦闘のために、財政、行政、情報活動をおこなうといった、単一の戦う党である。これらすべてのグループや支部組織は、同一の組織に属しており、戦闘、組織、政治活動に同時に責任をもつ一つの指導部によって、互いに関連をもった一つの体系として指導されるのである。

「全戦闘員が党員であり、全党員が戦闘員である。」これがわれわれのモットーである。これこそ、パレスチナ民族解放闘争の展望と一致した、戦う党の建設のための基本的戦略路線なのである。

第十七章　民主集中制―革命党内諸関係の基礎

革命家は、革命理論と活動戦略のもとに結集し、これらの原則に従って戦うために一つの政治組織に共に結合しているのであるが、かれらは、自分達の活動を組織するにあたってその方法を定めておかなければならない。たとえば、どのようにして組織の指導部は決定されるべきか。また変更が必要な場合には、それはどのようにしてなされるべきか。どのように様々な指導部間の関係は確立されるのか。党員と指導部の間にはどんな関係があるべきか。当面する問題や矛盾に対して、組織はいかにあるべきか。ある種の政治的問題に関して二つ以上の見解が生じた場合、組織の意思決定はどのようにして下されるべきか。どんな風にして、組織は規律を保ちその団結を維持するのか。党は、党内諸関係から、どのようにして党員の間の基本的な関係を作り出すのか。そしてそういった関係のためには、あらゆる個人的、家族的、地域的関係は役に立つことであろう。党員の中から有能な人間を見つけだし、その能力に合致した責任分担をあたえるにはどうすればよいか。どのようにして党は、その鉄の規律を維持できるのか。これはその政策や計画を実行する際、成功の鍵となるものである。もしこの規律がなければ、党はその党員の尊厳や権利や人間の発展を、だいなしにしてしまうことになる。党がこうしたあらゆる問題を処理するにあたって、組織的な方法を決定することは、党建設、規律と統一の保持、動員力の確保、影響力の増大、結果の強化にとって、基本的な条件である。もしこの方法が全党員に明確に理解され、支持されていないならば、党が種々の問題や論争に直面する際、一連

の混乱や矛盾、でたらめな個人的行動に終始することになるであろう。その結果党は麻痺状態となり、また本来そのために結成されたにもかかわらず、大衆の革命運動に対して、革命的に対応できなくなってしまうのである。

民主集中制は、現在、革命を指導するあらゆる革命党が確立している基本原則である。したがって、この組織原則の正当性は、単に理論的観点からのみうらづけられるのではなくて、実践と革命運動の経験によって確立されたものとして根拠づけられるのである。

党内民主主義とは、全党員が党の戦略、政治的立場、主要計画を知る権利があるということであり、またあらゆる問題について、すべての者が論議し、たとえまちがった意見にせよ、まったく自由に各自の意見を発表する権利があるということである。党の安全が許す範囲内で、全党員はあらゆることを知る権利をもち、党の戦略や立場について何ら制限されることなく討論に参加する権利をもち、誤りを批判しそれに抵抗する権利をもつこと。これは守らねばならない正当な権利であり、民主主義の根本である。

戦闘員や党員の意見によく耳を傾け、かれらの言うことを充分よく考え、活動に関する批判が正しく科学的なものであればその正当性を認め、正論に対しては謙虚にそれをとり入れ、党員たちのあやまった意見に対しては、対話、討論、説得を通して改めるようにつとめること。これは指導者の義務である。

革命はあらゆる熱情と豊かな活動力を必要とし、もてる能力のすべてを発揮することがその不可欠の条件である。しかしそれは、党員達が革命は自分達のものであり、それをどんな逸脱からも守らねばな

らないと感じていないならば、獲得できるものではない。そしてそうなるための道は、党員の討論と対話と批判の自由である。

集団指導制は、党内民主主義のもう一つの側面である。集団指導制は、個人的な独裁主義や逸脱を防ぐようにし、またそれは指導者の間の一定の自制や対話、討論を保証する。そしてまたそれは物事を複数の観点から見ることを保証し、したがって、党の立場はできるかぎり健全になるのである。集団指導制の中に深い溝ができたとしても、それは、集団指導の原則を殺してしまうことによってではなく、明確な路線にのっとった責任と義務の配分によって、調整することができるのである。党指導部、すなわち政策決定機関およびそれを実行する諸機関に対する党の信頼こそ、党の組織を堅固にし、困難にたいしてくじけず、あらゆる逸脱から身を守り、最も健全な政治的見解や諸計画を確立することができるようにするのである。

革命党の党内民主主義の第三の側面は、党員がその指導部とその責任に対して意見を述べることができ、それを信任したり不信任したりすることができるということである。結局それは、党の指導部の過失や無能や偏向、さらにその責任についての誤った考え方などが明らかにされた場合には、党員がその指導部を変える力を持つということである。そしてこの責任についての誤った考え方は、党員と指導部の関係にも悪影響をあたえるものである。党員の信頼を得ていない指導部では、党員を動員することも、強い規律を維持することも、活動的で熱情的な作風を作り出すこともできない。党員が自分達の指導部を改革できる権利をもつという客観的な統制によって、指導部は自己の活動や責務にたいする責任感が強まり、もてる精いっぱいの能力を発揮するようになる。こうして指導部は、

かれらのひき受けた指導の機能を一定の水準にまで高めることができるようになるのである。

党内民主主義をこの三つの側面から定義しよう　試みるだけでは、それが大切であるにもかかわらず、実際問題として、民主主義の本質やその価値、意義をまったく完全に明らかに、説明しつくすには充分だとは言えない。またそれは、民主主義が党組織に及ぼす効果的で積極的な影響や、その効果の大きさを十分に明らかにできるとは言えない。

持続的で革命的な民主主義教育こそが、民主主義の神髄を実現し、その意義や積極的な効果をあますところなく明らかにする唯一の道である。また次のことは強調しておかなければならない。すなわち、責任ある指導部が、民主主義の意義と重要性を理解し、その具体化のために努力することは、一般党員がそれを理解し実践する以上に大切であるということである。こうしてはじめて民主主義は、組織内諸関係に反映され、価値基準および生きた伝統となることができるのである。こうして民主主義は、一般党員の意見に耳を傾け、かれらと共に生き、かれらのかかえている問題にともにかかわりたいという真の願いとなる。そしてこのことは、公開討論や全体会議をもったり、全党員の間に優劣関係ではなく真の同志的関係を確立することによって可能なのである。民主主義は、官僚主義的な関係をなくし、責任が何らかの物質的、精神的特権と結びつかないようにし、また党員の尊厳が損われないように責任をまっとうさせることであろう。

われわれはまた、われわれが育ってきた階級社会から受けついできたあらゆる慣習や伝統から抜けださねばならず、また形式的な礼儀や追従や卑屈の代りに、相互の尊敬と互いの能力を正しく客観的に認めあう関係を確立しなければならない。責任ある指導者達は、自分に向けられた批判に不寛容で

あってはならず、反対にそれを勇気づけ、党員の道徳的勇気を高揚し、党員の勇敢さと革命的な態度を自から育てていくぐらいに心が広くなければならない。

このようにして民主主義は、それが一定の規約や党内規律の形態をとるまえに、人間的で革命的な党内生活の型となるのである。

だが民主主義は、党内諸関係の根本となる基本原則、すなわち民主集中制という原則の単なる一側面であるにすぎないのである。この原則を民主主義という一つの視点からのみ理解することは、大きな危険をまねくこととなる。集中制を欠いた民主主義は、まったくの無政府主義や、逸脱や規律の欠如となり、その結果、党を活動不能の状態におとしいれ、また党がその計画の実行をめざして、首尾一貫した運動をすることを不可能にしてしまう。このことは、明確に理解されねばならない

党は、事態の進展に応じて、その見解を出していく必要がある。また党は、それが従うべき方針を出していく必要があり、その行動を規制する規則や規約を起草する必要がある。そしてこれらの問題を議論する過程では、当然にも複数の観点や主張や意見があることであろう。しかし党は、全員がある特定の主張が正しいと納得のいくまで、これらの問題をいつまでも議論している訳にはいかない。その集団指導制の枠内で、その問題、主張、綱領について、ある程度の時間をかけて議論がつくされたならば、適当な時に党は、一つの主張をとり綱領を採択し、決定を確認する必要がある。これは通常、多数の観点、主張、決定に従っておこなわれるのであるが、全員の賛成が例外なくえられるとは決っていない。

ではその決定はどのようにしておこなわれるのであろうか。議論が続いている間は、組織はいかなる立場もとれずに、麻痺状態のままでいなければならないのであろうか。また各党員は、自分の物の見方に固執して、その意見を言い張り続けることが許されていいものだろうか。これでは、無政府状態や麻痺状態以外の何ものでもない。そしてこれを打開する道が、民主集中制である。その解決の道は、多数意見への少数意見の服従ということである。そしてこれによって、党は団結と行動力を堅持することができるのである。つまり党内のあらゆる意見は、組織内ではまったく自由に表明できる当然の権利をもっている。しかしこの見解がいったん討論に付され、党(多数者)が一定の態度をとってしまったならば、あらためて党大会や政策決定機関でその討論をとり上る機会が別に生じてこないかぎりは、全党員はその決定を支持し遵守して、それに完全に従って行動する義務がある。

これが、集中制という概念の第一の側面である。第二の側面は、下級の指導部はより上級の指導部に従うということであり、また、党の中央指導部は、あらゆる基本的問題に関する決定権をもっており、どんな下級の指導部によってとられた主張や決定をも、すべて批判する資格があるということである。いかなる機関、分野、領域での党活動も、党全体に影響を与えるものであり、特殊な指導機関でなされたどんな誤りでも、党の将来や運命に影響を及ぼすこととなるのである。したがって、党の諸問題を統御し、党がおこなう政策や活動にかんして団結と調和をはかり、党の支部や機関が犯す重大なあやまりや、逸脱行為を防ぐために、中央指導部は下級指導部の諸決定について批判する権利をもたなければならない。当然のことだがこのことは、中央指導部が、党によって行なわれたどんな活動にも干渉するということではない。それは、中央指導部が、そういった干渉をすることが労働者の利益を守るために必要であると判断した時にのみ、その権利をもつということにすぎない。

集中制概念の第三の側面は、民主的に決定した事項を実行するにあたって、党指導部は全責任を有し絶対的権力をもつということである。活動が実行に移されると民主主義は停止され、そして議論や論争は服従、規律、実行、指令への完全な服従にとってかわられるのである。これがなければ、われわれは、困難で長い解放闘争をやり抜く高度な規律をもった革命党の建設はなしえないのである。

民主集中制の原則は、党内のあらゆる関係の重要な基礎である。それは、党員の権利と義務、自由と秩序の間を結ぶ原則である。

全党員がこの原則を理解し、その全意義をふまえ、常にその原則の両面と同時に統一した面からそれを見ていこうと努力すること、そして指導者と一般党員がこの原則を正直に責任をもって適用しようと努力することが、革命党の建設を最大限に保証するものである。そしてこうした党こそが、暴力革命と長い困難な解放戦争を指導することができるのである。

この原則は、他の一連の党内生活を支配する組織原則の基礎をなしている。そしてその諸原則とは、集団指導制、党員の各階級間の指導関係、指導と大衆の間の相互関係、少数者の多数者への服従、革命党内のイデオロギー的な矛盾や派閥をなくすこと、組織への個人の服従、全党支部の中央委員会への服従などである。この基本原則とそれから生れた諸原則は、諸関係、諸権力、責任、賞罰を規定する一連の党内規約や基本規則を決定するもとになるであろう。これらすべては、規律ある民主的革命組織としての党内生活の一般的様式を完成するものである。

第十八章　批判と自己批判

党の指導者、幹部、同盟員の自己批判とその教育が健全な方法によっておこなわれるならば、それは、誤りの発見と是正にたいして多くの保証をあたえることになり、またこれらのあやまりによってひきおこされる失敗とか麻痺状態によって、党が壊滅させられることなしに、党の永続的な発展がもたらされるものである。いかなる党も個人も、その活動の中で過失をまぬがれるものではない。しかし自己批判をおこなうことによって、あやまりを利益に変え、消極的な態度を積極的な態度に転じることができる。

時には自分の仕事を評価するために立ちどまり、党あるいは党の政策や諸活動を分析して、革命的で科学的な観点から、党の政策、綱領、主張がどのような影響を大衆運動に及ぼしたかを、その積極面、消極面にわたってあとづけてみることは必要である。それによって、党はそのあやまちを克服し、実際問題に照して活動綱領を発展させ、ついには活動を成功に導くことができるのである。

したがって、党指導者や一般党員は批判に耳を傾け、よく考え、それから利益をくみとることに慣れなければならない。またあやまりを発見した以上は、それをおおい隠すようなことはせず、それを認め、それを改めるようにしなければならない。

しかし、党員や大衆からあびせられた批判にたいして、すぐむきになり感情的になることは、孤立主義を招き、党員やシンパサイザーがしてくれた忠告から利益を生み出すことができずに、そのあやま

りを続け、党と大衆の間に壁を作ることになるであろう。

自信があり公正な指導者とは、批判を歓迎し、それをよく聞き、よく考え、それから利益をくみとる指導者であり、また誤りが生じた場合には、それを認め、改めようとし、つねに実際の経験にしたがって、成長と革新をとげることのできる指導者である。革命党にとって批判の実行とは、それが新鮮な空気を吸い込み不健全な空気を吐きだすことによって、党の活動能力を持続的に更新していくことができる方法なのである。

毛沢東は次のように言っている。

「まじめな自己批判の有無も、またわれわれが他の政党と区別される顕著な指標の一つである。かつてのべたことがあるように、部屋はつねに掃除すべきで、掃除しなければほこりだらけになってしまうし、顔はつねに洗うべきで、洗わなければほこりまみれになってしまう。わが同志の思想、わが党の活動にも、ほこりがかかるので、やはり掃除をし、洗いおとすべきである。「流れる水は腐らず、扉の心棒は虫がくわない」というのは、それらがたえず運動していて、微生物やその他の生物からの侵食に抵抗しているためである。われわれにとっては、つねに活動を点検し、点検のなかで民主的作風をおしひろめ、批判と自己批判をおそれず、「気づいたことは何でもいい、いうことは残さずいう」、「いうものはとがめられず、聞くものはいましめとする」、「あやまりがあればあらため、なければいっそう努力する」という中国人民の有益な格言を実行することこそ、わが同志の思想やわが党のからだにたいする各種の政治のほこりや政治の微生物の侵食に抵抗する唯一の効果的な方法である。」

われわれが批判を実行することの必要を主張するにあたっては、同時に、批判が党を弱めるのではなく強める武器となるように批判の基準を定めておかなければならないことを、強調しておく必要がある。考慮しなければならない三つの基本的基準がある。すなわち (1) 批判が客観性をもつこと、(2) 批判が破壊や分裂の方向ではなく、あやまりの是正の方向にむけられていること、(3) それが、党活動をささいな二次的な論争に逸脱させないように、基本的な問題をとり扱っていること。以上である。

われわれは、偉大な革命を指導した革命的組織論には、実際にこれらの批判の基準が明確に見られるということを指摘しておきたい。したがって上にあげた基準も、人民戦線（ＰＦＬＰ）の指導部が、批判をこれから実行するから基準云々と言ってみたり、また当面の批判に対抗する意味からそれを振りまわしているのでもないのである。

批判の客観性という基準にかんして、毛沢東は次のように言っている。

「党内批判にあたっては、主観的な独断や批判の卑俗化を防がなければならず、発言するにはよりどころを重んじ、批判するには政治的な面に目をむけなければならない。」

批判の方向は、あやまりを是正することにあり、破壊をめざすものではないという点に関して、毛沢東は次のように述べている。

「……しかし、われわれが、あやまりを指摘し、欠点を批判する目的は、医者が病気をなおすのと同様、まったく人を救うためであって、死においこむためではない。だれかが盲腸炎をわずらったとしても、医者が盲腸をきればその人はたすかるのである。あやまりをおかした人はだれであろうと、病気をかくし、医者をきらい、あやまりを固執して、どうにも救えない状態にまでたちいた

るのでなく、すなおに、ほんとうになおそうとし、あらためようとするのでありさえすれば、われわれはその人を歓迎し、よい同志になれるように、その病をなおすものである。この仕事は、けっして、一時の腹いせから、むちゃくちゃにやっつけることで効果のあがるものではない。思想上の病や政治上の病にたいしては、けっして、向こうみずな態度をとってはならず、「病をなおして人を救う」態度をとるべきであり、これこそ正しい効果的な方法である。」

批判は、基本的な問題に対してなされる必要があるということにかんして、毛沢東は次のように述べている。

「党内批判の問題についてもう一つふれなければならない点は、一部の同志の批判が小さいところにだけ目をむけ、大きなところには目をむけないことである。かれらには、批判の主要な任務が政治上のあやまりと組織上のあやまりの指摘にあることがわからない。個人的な欠点については、それが政治的なあやまりや組織的なあやまりとかかわりがなければ、同志たちをどうしてよいかわからなくさせるほど多く指摘する必要はない。そのうえ、このような批判が高じてくると、党内の注意力は完全に小さな欠点に集中され、人びとは小心翼々とした君子に変わってしまい、党の政治的任務を忘れることになる。これは大きな危険である。」

このような規準の中で批判がおこなわれるということは、常に規律をもった民主的な党内生活の一つの表示となるにちがいない。

以上が人民戦線（ＰＦＬＰ）の組織戦略である。われわれがこれらの路線を充分に自分のものとし、それをわれわれの組織建設の道案内とすることによって、われわれは人民戦線（ＰＦＬＰ）を革命的

プロレタリアの党とすることができるのである。その党とは大衆と密接に結びついて活動し、その運動を指導する党であり、武装闘争を遂行し、常に生き生きとして規律のある民主的な党である。

現在、われわれに組織的な困難が明らかに多く存在するのは、人民戦線（ＰＦＬＰ）がもともとこのような戦略のもとに建設されていなかったという事実にもとづいている。われわれの現在の組織的な欠陥を分析するにあたって、万一、われわれが部分的で個人的な判断に縛られているとしたら、それは大きな誤りであろう。われわれの組織戦略を完全に明確に出し、党内にわれわれの長くて困難な努力を示すことは、われわれの組織上の諸問題を一掃することになるであろう。そして実際、これらの組織的問題は、現在コマンド・アクションに結集しているすべての政治組織に、多かれ少なかれ共通した一般的な問題なのである。

このことは、革命党が問題をかかえずにやっていける時がいつか来るであろうということを意味する訳ではない。こうした考えは、非現実的であり非科学的である。われわれの希望とは、もっと高度でもっと革命的な段階の問題に対決するために、現在の段階の党内生活の問題からは卒業したいということである。

第十九章　アラブ・ナショナリズム運動（ＡＮＭ）とＰＦＬＰ

当初、パレスチナ解放人民戦線（ＰＦＬＰ）は、「アラブ・ナショナリスト運動（ＡＮＭ）」のパレスチナ支部、「帰還の英雄」（Heroes of the Return）、「パレスチナ解放戦線」、そしてすぐに

第四のグループを形成することとなった独立諸組織のグループから形成された。この形成過程からして、当初のＰＦＬＰは、科学的な社会主義理論にもとずいた完全に左翼的な政治的観点に立って、解放闘争をおし進めるものではなかった。実際、暗黙のうちに理解されていたことは、ＰＦＬＰは一般的に進歩的な特色をもった政治理想を体現すべきであり、それは、実践が進むにつれて一層明確なものになっていくであろう、ということであった。以上が、ＰＦＬＰの政治思想に関して言えることである。同様にその組織形成過程に関して言えば、ＰＦＬＰは、同一の革命的組織戦略路線にもとづいた党組織として統一されるべきだとは考えられていなかった。そしてこの組線路線については今も議論されているところである。また当分の間、ＰＦＬＰはいくつかの組織からなりたち、それぞれは独立した存在を維持するであろうと考えられていた。しかしながら、これらの組織の間で統合しようという計画の気運が生れ、情勢認識のために各々が準備した教育的資料を統合しようとする試みがなされた。そしてこのことは、実践活動や経験にもとずいた戦略計画に従ってこれらの組織を統一することへの道を開いたのである。

こういう状況からしてみて、ＡＮＭのパレスチナ支部組織とＰＦＬＰの他の部分とに、はっきりとした客観的相違があることは明白であった。ＡＮＭは、一九六七年七月の中央委員会決定から見てわかるように、社会主義革命の観点をもって、パレスチナ解放戦略の見通しをたてていた。他方、ＰＦＬＰは進歩主義的な解放思想をもっているにすぎなかった。さらにＡＮＭは、単一の党組織を体現しており、革命的な組織戦略にしたがって組織再建の準備を進めていたが、他方、ＰＦＬＰは、組織構造がそれぞれに異った諸組織の集団でしかなかった。したがって結成当時のＰＦＬＰは、科学的で革

命的な展望をもち、進歩的な解放思想をもつ諸組織の連合戦線といった性格をもっていた。そしてそれは、統一にむかう傾向をもちながらも、おのおの独立した組織の連合体として形成されていたのである。このような場合、ＡＮＭがこの戦線の中で独特な存在であり、独特な役割を果していたのは当然のことであった。

以上がＰＦＬＰ成立当時の概要である。しかしながら、ＰＦＬＰの発展とその内部分裂によって、われわれはこれまでとはまったく異なる局面をむかえた。その結果として、ＡＮＭとＰＦＬＰの関係も、新しい様相を帯びてくることになった。

まずパレスチナ解放戦線（ＰＬＦ）が、進歩主義的な独立グループを共に、ＰＦＬＰから分離した。そしてＰＦＬＰは、ＡＮＬのパレスチナ支部と「帰還の英雄」とで構成されることになった。他方、その新たな状況によって、ＡＮＭの見解がＰＦＬＰに通るようになり、ＡＮＭはＰＦＬＰを通じて、そのパレスチナ情勢にかんする革命的分析、解放闘争にかんする政治的見通しなど、すなわちあらゆる政治思想を表明できるようになった。その結果、ＡＮＭとＰＦＬＰは、ほとんど完全に一体化の様相を呈している。ＰＦＬＰの政治思想は、ＡＮＭの政治思想とまったく同じものであり、またその組織構造は、大部分ＡＮＭと同じである。ＡＮＭの組織規模は、ＰＦＬＰの中で大きな割合をなしている。もしわれわれが、「帰還の英雄」という組織はどのように誕生してきたのか、またその第一線級の指導的幹部や、その一般的、知的雰囲気には、どのような基準が支配していくのか、また、ＡＮＭと「帰還の英雄」との同志的関係はどうかなど、これらのあらゆる点を考慮に入れるならば、ＰＦＬＰは、おおくの面からＡＮＭとほとんど同一組織であるといえるであろう。思想や組織の上で同一で

あるならば、もはや、ＡＮＭとＰＦＬＰに特別な戦略的差異があるということはあたらない。ＡＮＭは独立と独自性を保っているという主張があって、そのためにＡＮＭとＰＦＬＰとは別のものだと実際に感じている人があるかもしれないが、それはいずれも、客観的に、はっきりと確実な差異にもとずく主張ではない。いったいＡＮＭがＰＦＬＰと異っていると主張する根拠は何であろうか。その政治的見解であろうか。いな。ＰＦＬＰの戦闘にかんする政治的見解は、ＡＮＭのそれと同一である。では組織的な差異であろうか。いな。たしかに、ＰＦＬＰの中に「帰還の英雄」が存在することが、特殊な組織問題となっていることは事実であり、またＰＦＬＰがあまりにも急に組織されたために、一定の組織の性格にかんしては、ＡＮＭと比べて強さの面でも訓練の面でも劣っているということはある。しかしだからといってそれは、われわれの戦略がＰＦＬＰ内部でＡＮＭを特別で独自な組織として維持することを目ざすべきである。ということにはならないのである。二月大会は、この分析にしたがって、将来ＡＮＭとＰＦＬＰとの関係を方向づけ、導いていく組織戦略路線を提起した。この路線は、ＡＮＭパレスチナ支部をＰＦＬＰの中に融合させる活動を呼びかけ、同時に「帰還の英雄」にも同様のことを呼びかけるものであり、また、ＰＦＬＰの組織生活を、意識性のある訓練をつんだ、革命的で献身的な、党生活のレベルに高めていく計画と活動を呼びかけるものである。

このようなことに基ずいて、パレスチナ解放人民戦線（ＰＦＬＰ）は、その結成当時の概念ではなくなった。すなわち、その思想や組織関係にかんして、一般的な政治的意味での「戦線」という概念ではなくなったのである。そして、人民戦線（ＰＦＬＰ）にかんするわれわれの理解も、それを建設するにあたっての方向性も、以前とは違ったものになっているのである。

ＰＦＬＰに対する現在のわれわれの理解とそれを建設するにあたっての方向性によれば、ＰＦＬＰとは、この報告で述べてきたような政治戦略と組織戦略にもとづいた革命党なのである。

ＡＮＭとＰＦＬＰを完全に融合させていく過程で、われわれの導きとなる正しい合言葉は次のようなものである。すなわち、

「ＰＦＬＰあってのＡＮＭであり、ＡＮＭあってのＰＦＬＰであってはならない。」